機関誌
観光文化
Tourism Culture

公益財団法人 日本交通公社

243
October
2019

観光と図書館
～地域の観光に図書館はどう寄与できるか～

1. 図書館を取り巻く動向と観光振興
(公財)日本交通公社 吉澤清良

2. 事例に学ぶ、図書館を活かした地域の観光魅力づくり
高山市図書館 西田純一
八戸ブックセンター・音喜多信嗣
恩納村文化情報センター・大隅一志
奈良県立図書情報館 乾聰一郎
甲州市立勝沼図書館 古屋美智留
小布施町立図書館 市村勝巳
千代田区立千代田図書館 井上理江
東近江市立八日市図書館 山梶瑞穂
伊那市立高遠町図書館 諸田和幸

コラム 愛知県図書館
「二度目の旅は図書館から」
(公財)日本交通公社 大隅一志

コラム 大好物は郷土資料
ノンフィクションライター 眞鍋じゅんこ

3. 対談 観光と図書館連携と活用の可能性をあらためて考える
嶋田 学(奈良大学)
×
猪谷千香(ジャーナリスト/作家)

コラム 半世紀以上も前に提唱されていた〝観光と図書館〟

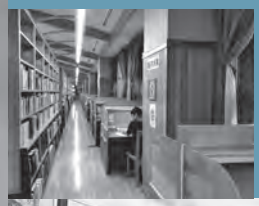
視座 観光と図書館～地域の観光に図書館はどう寄与できるか
(公財)日本交通公社 吉澤清良・大隅一志

巻頭言 インタビュー
「うとういむち」の心を図書館から
沖縄県恩納村長 長浜善巳

活動報告
第⑰回 たびとしょCafe
東北1000kmをつなぐ〝みちのく潮風トレイル〟
環境省・櫻庭佑輔

【連載】
わたしの1冊 第16回
『外食産業創業者列伝』
牛田泰正著 トラベルジャーナル学園 中村裕

観光を学ぶということ④
琉球大学国際地域創造学部
観光社会学ゼミ
琉球大学 越智正樹



図書館は、最も多くの利用がある公共施設のひとつだと言われています。

皆さんもお住まいの地域の図書館に、一度は訪れたことがあるのではないでしょうか。

多くの方々で賑わう図書館には、様々な種類の書籍や資料等が所蔵されていますが、特に郷土関係の資料は群を抜いて充実しています。

図書館は、まさに地域の知的遺産の宝庫なのです。

昨今、旅行者の中には、旅先の歴史や伝統をより深く知りたい、地域の人とふれあいたい、という方も増えてきました。しかし、旅行者を図書館で見かけることはほとんどありません。

今回の特集では、全国各地の図書館の事例等から、観光と図書館の接点、観光と図書館の連携・融合に向けたヒントを探っていきます。

「うとぅいむち」の心を図書館から

沖縄県恩納村長
長浜善巳

図書館（恩納村文化情報センター）が村にできたのは、２０１５（平成27）年４月のこと。子どもからお年寄りまで、何十年もの長い間、村民が待ち望んだ施設である。

開館以来、図書館へはできるだけ足を運び、図書館の様子や利用する姿を見るようにしている。

村の子どもたちを前に「こわい話（沖縄の昔話）」をしたこともある。図書館での読み聞かせは、普段は図書館のスタッフや子供のお母さんたちがやってくれるのだが、村長が自らやるというので親も子どもたちも興味津々で聞いてくれた。それなりに練習をした甲斐あって、子どもたちはけっこう怖がってくれた。こうした郷土文化の伝承はもちろん、子どもの頃から本を読むことの楽しさを知り、豊かに生きるための知識や力を養ううえで、図書館は実に大切な場所である。

恩納村は県内有数の観光地であるからこそ、図書館からも村や沖縄の魅力を伝えていきたいと考えている。それには、村民が地域を良く知り、地域の魅力を伝えることができるようになることだ。一方で、観光客が来ている姿を見て、村民も自分たちの住む地域のすばらしさに気づかされることもある。文化に垣根はない。

沖縄には「うとぅいむち」という「おもてなし」を意味する言葉がある。村が大事にしたいのは「おもてなし」、「人と人とのつながり」である。村を訪れてくれる年間３００万人を越える観光客一人ひとりとのつながりを大切にしたい。村民の心を育て、それを観光客におもてなしとして伝えていけたらいい。

「うとぅいむち」の心を育て、村民と観光客がともに村の魅力を再発見する場として、図書館は欠かせない存在である。（談）

写真提供：恩納村

※
「うとぅいむち」…おもてなし、ご接待
出典：「沖縄語辞典」研究社

機関誌
観光文化
公益財団法人 日本交通公社
第243号

目次

インタビュー 巻頭言 「うとういむち」の心を図書館から 沖縄県恩納村長 長浜善巳 …… P1

特集
観光と図書館
～地域の観光に図書館はどう寄与できるか～

① 図書館を取り巻く動向と観光振興
まちづくりの中核施設、コミュニティの場として図書館を整備する動きが全国的に見られるようになった。では、観光において図書館はどのような存在なのだろうか
公益財団法人日本交通公社 観光文化情報センター長 吉澤清良 …… P4

② 事例に学ぶ、図書館を活かした地域の観光魅力づくり
注目すべき9つの図書館の創意工夫と想いを紹介する。地域の特性を踏まえつつも、ある共通項が見出せる。 P8

1 高山市図書館「煥章館」 観光のまちの、情報発信の「要」として 館長 西田純一 …… P10
2 八戸ブックセンター 交流を増やし、まちを元気にしていく 所長 音喜多信嗣 …… P12
3 恩納村文化情報センター 村の基幹産業＝観光＝と図書館の融合 旅の図書館 副館長 大隅一志 …… P14
4 奈良県立図書情報館 観光客へ本の貸し出し、地元の人へ情報発信 図書・公文書課課長 乾聰一郎 …… P16
5 甲州市立勝沼図書館 「ワインの情報は全部図書館にある」 司書 古屋美智留 …… P18
6 小布施町立図書館 まち全体が交流空間。その中心に図書館がある 事務長 市村勝巳 …… P20
7 千代田区立千代田図書館 街と本のコンシェルジュが居て、図書館発のツアーもある ライター 井上理江 …… P22

右：大阪府立中之島図書館
下：小布施町立図書館

上：甲州市立勝沼図書館
中：小布施町立図書館
下：「まちじゅう図書館」認定旗（小布施町）

8 東近江市立八日市図書館 今を伝える情報誌「そこら」が、地域の人をつないでいく 永源寺図書館 館長 山梶瑞穂 …… P 24

9 伊那市立高遠町図書館 図書館がハブになり、情報と人の繋がりを再構築する 伊那市地域おこし協力隊 諸田和幸 …… P 26

コラム・1 愛知県図書館「二度目の旅は図書館から」 大隅一志 …… P 28

コラム・2 大好物は郷土資料 ノンフィクションライター 眞鍋じゅんこ …… P 29

③ 対談 観光と図書館 連携と活用の可能性をあらためて考える
嶋田学（奈良大学文学部 教授）×猪谷千香（ジャーナリスト／作家）
住民たち自身が自分の町のいいところに気づく、見つける、創る時のきっかけとなるのが観光という文化（嶋田）で、図書館はその土地の魅力を自分たちで引き出しつつ、発信する拠点になり得る（猪谷）。 P 30

コラム・3 半世紀以上も前に提唱されていた〝観光と図書館〟 …… P 38

座視 観光と図書館 ～地域の観光に図書館はどう寄与できるか～ 吉澤清良 大隅一志
知的遺産の宝庫で誰でも利用できる図書館は、その考え方や取り組み方次第で、観光と結びつく可能性は高い P 39

地域の観光に寄与する図書館注目事例 …… P 46

活動報告 第17回 たびとしょCafe開催 東北1000kmをつなぐ〝みちのく潮風トレイル〟 …… P 48
ゲスト：環境省東北地方環境事務所自然環境整備課 課長補佐 櫻庭佑輔 報告：（公財）日本交通公社観光文化情報センター企画室 副主任研究員 門脇茉海

【連載】わたしの1冊・第16回 『外食産業創業者列伝』 牛田泰正・著 学校法人トラベルジャーナル学園 ホスピタリティ ツーリズム専門学校 校長 中村裕 …… P 54

観光を学ぶということ・第4回 琉球大学 観光社会学ゼミ テーマは「観光を通じた地域振興、あるいは地域振興のための観光」 琉球大学 国際地域創造学部 教授 越智正樹 …… P 55

1

図書館を取り巻く動向と観光振興

公益財団法人日本交通公社
観光文化情報センター長 旅の図書館長　吉澤清良

はじめに

当財団は、公益事業の一環で、1978年より「旅の図書館」を運営している。当館では、約6万冊の観光関連資料を体系立てて配架する独自分類の導入や、専門性・稀少性の高い蔵書の公開、書架のある空間で研究交流を行う「たびとしょCafe」の開催など、観光に関する情報や人のネットワーク拠点となる「観光研究プラットフォーム」の構築に向けて、様々な取り組みを行っている。

最近では少しずつ図書館界でも知られるようになり、全国各地の図書館職員の研修等でご利用いただく機会も増えてきた。職員一同、少しでも観光文化の振興のお役に立てればとの想いで業務にあたっている。

今回の特集では、地域（旅行先）における図書館を取り上げて、図書館と観光との連携・融合について考えてみたい。

本特集の背景と目的

近年の図書館（特に公立図書館）は、図書の閲覧・貸出にとどまらず、地域住民の抱える、子育て、教育、就職、年金、健康、介護など様々な課題の解決に役立つ情報の提供、さらには、地域とのつながり・コミュニティの場としての役割も期待されている。昨今では、まちづくりの中核施設として図書館を整備する動きも全国的に見られるなど、図書館は地域の再生・活性化を図る上で欠かせない存在として注目されている。

では、観光地において図書館はどのような存在なのだろうか。

本特集では、特集1で図書館の定義や設置の状況、近年の図書館を取り巻く動向、観光と図書館の連携の現状などを概観していく。特集2では、地域、特に観光地の魅力づくりに図書館が寄与している特徴的な事例を通して、図書館と観光の連携、融合の現状やヒントを探っていく。特集3では、図書館に造詣の深い、嶋田学氏（奈良大学教授／前瀬戸内市民図書館館長）、猪谷千香氏（ジャーナリスト／作家）より、図書館と観光による連携の可能性などについてお伺いしている。これらを踏まえ、視座では、図書館と観光の連携・融合に向けた課題や今後の取り組みの推進に向けたポイントを考察していく。

なお、今回の特集では、原則として「公共図書館」、特に自治体が設置する「公立図書館」を研究対象として取り上げている。

図書館とは ～図書館の定義、種別等

図書館は、「図書館法第2条」に「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」と記されている。図書館法は「社会教育法」に基づいているが、同法（第9条）では、「図書館及び博物館は、社会教育のための機関とする」として規定されている。

図書館は、利用者の種別によって、「国立図書館」、「公共図書館」、「大学図書館」、「学校図書館」、「専門図書館」、その他の施設に設置される図書館（点字図書館、病院患者図書館など）に分けられる。「公共図書館」とは、自治体が設置する「公立図書館（都道府県立・市区町村立）」と、法人等が設置する「私立図書館」を総称したものである。

公益社団法人日本図書館協会によると（表1）、2018年の公共図書館の設置数は3296館で、都道府県の設置率は100％、市区の設置率は99％、町村の設置率は57％となっており、図書館数は、微増ながらも一貫して増え続けている。その一方で、専任職員の数は1万46人と長らく減少傾向が続いている。

表1 公共図書館集計（2018年）

		都道府県立	市区立	町村立	私立	計	前年度
設置	自治体数	47	814	927	—	—	—
	設置自治体数	47	805	528	—	—	—
	設置率	100％	99％	57％	—	—	—
図書館	図書館総数	58	2,599	620	19	3,296	3,292
職員数	専任職員計（人）	1,516	7,756	726	48	10,046	10,251
	うち司書・司書補（人）	870	4,000	405	25	5,300	5,357

資料：『日本の図書館　統計と名簿』（（公社）日本図書館協会）

図書館の歴史
～観光・まちづくりをめぐる動向

表2はわが国の図書館の歩みと観光の関わりを整理したものであるが、この中でも特徴的な事項について概観しておく。

○閲覧から貸出重視へ

公共図書館の設置を目的とした活動では、日本図書館協会が1963年に「中小都市における公共図書館の運営（中小レポート）」、1970年に「市民の図書館」を発表し、住民のための図書館づくりの重要性を指摘、その後の大きな指針となった。

1965年開始の「日野市立移動図書館ひまわり号」、1973年開館の「日野市立中央図書館」での図書の貸出を重視する取り組みが、全国の市区を中心に広がりを見せるようになる。我が国の公共図書館は、1960年代末から70年代以降、館内での閲覧から貸出が一般的になるという大きな変化を遂げてきた。

○地域課題解決の支援へ

1980年代に入ると国や自治体による行財政改革が進行し、図書館にも運営の効率化やより高度なサービスの提供が求められるようになり、「新しい時代（生涯学習・高度情報化の時代）に向けての公共図書館の在り方について―中間報告」（1988年、社会教育審議会社会教育施設分科会）など、図書館に関する様々な報告が出されるようになる。

1990年代後半からのインターネットの普及拡大を経て、2001年には「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準」（文部科学省）が告示され、2006年には「これからの図書館像―地域を支える情報拠点をめざして―（報告）」（これからの図書館の在り方検討協力者会議）が提言されている。これを受けて、全国の図書館では、従来の閲覧・貸出サービスを維持しつつ、行政支援、学校教育支援、子育て支援、ビジネス支援（地場産業支援）や、医療・健康、法律などに関する情報提供をさらに一層強化していくようになる。

○まちづくりの中核施設へ

1999年の「民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律（PFI法）」の制定や、2003年の地方自治法の一部改正による「指定管理者制度」の導入、また、2006年の「まちづくり三法」の改正以降、特に国土交通省が取り組む、都市の中心部に行政、商業、住宅など様々な都市機能を集中させる「コンパクトシティ」の政策は、全国の図書館に大きな影響を与えたと言われている。また、2014年に総務省が全国の自治体に要請した、全ての公共施設を対象に総合的かつ計画的な管理を推進するための「公共施設等総合管理計画」の策定は、中心市街地への図書館を含めた複合施設の整備を後押ししたものと推察される。

これらの法制度の導入により、特に2010年代に入って、開放的なオープンテラス席や飲食が可能なラウンジを設けた図書館、カフェを併設した図書館、中心市街地の複合施設内に整備された図書館など、様々な図書館が登場してくることになる。

2012年、岩手県紫波町に「紫波中央駅前開発（オガールプロジェクト）」の中核施設として公民連携（PFI）により整備された「紫波町図書館」は、地方創生のモデルとしても注目を集めている。

また、2013年に佐賀県武雄市にリニューアルオープンした「武雄市図書館」では、「TSUTAYA」を運営するカルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）が指定管理者となり、年中無休、開館

時間の延長（9時～21時）、カフェの併設などに取り組み、現在でも地域内外から多くの来館者を集めている。

図書館への民間事業者の関与は、その創意工夫により住民サービスの向上や経費の削減が期待される一方で、図書の選択や施設運営の継続性、安定性などの面で不安視する見方も依然として根強いが、今後も「交流」、「賑わい」、「まちづくり」などが期待される図書館の整備は増えてくるものと思われる。

観光と図書館の連携の現状

公共図書館はそもそも社会教育施設であるため、主たる利用対象は地域住民であり、多くの地域では観光客は利用者として想定されていない。

当財団が今回の特集にあたり全国の自治体の観光部署を対象に7月に実施した「観光と図書館に関するアンケート調査（81団体回答）」（表3）でも、観光客の利用を「想定している」との回答は14・8％にとどまっており、「想定していない」が64・2％を占めている。現在の観光部署と図書館の連携も

表2 わが国の図書館の歩みと観光との関わり

		事項（トピック）	図書館の動向
1870年代～		近代図書館の誕生	
1900年代～		1918（大7）…和田萬吉（東京帝国大学図書館長）「旅客の為めに図書館」掲載（機関誌『ツーリスト』）	
1940年代			1948（昭23）…国立国会図書館設立
1950年代		1950（昭25）…図書館法公布 1954（昭29）…南益行「観光図書館論」掲載（『図書館界』）	
1960年代		1963（昭38）…『中小都市における公共図書館の運営（中小レポート）』発表（公共図書館の本質的な機能＝資料提供・館外奉仕）	1965（昭40）…日野市立図書館「移動図書館」開始
1970年代	貸出を中心とした公共図書館の普及・発展	1970（昭45）…『市民の図書館』発表（市民貸出・児童サービス・全域サービスを重視） 1979（昭54）…『図書館の自由に関する宣言』改訂	1973（昭48）…日野市立中央図書館開館
1980年代		国や自治体による行財政改革が進行 1987（昭62）…『公立図書館の任務と目標』発表 1988（昭63）…『新しい時代に向けての公共図書館の在り方について』（近年における文科省の図書館行政の出発点）	1980年代後半…墨田区立八広図書館　全国の観光パンフレットを収集・提供/石垣市立図書館　観光客に利用カードを発行
1990年代		1990年代後半～ インターネットの普及 1999（平11）…図書館法改正	
2000年代	課題解決型、ビジネス支援型図書館の登場 ↓ 図書館の多様化（複合化、サードプレイスとしての図書館など）	2001（平成13）…『公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準』発表（国による基準を示す） 2003（平成15）…指定管理者制度の導入/菅谷明子『未来をつくる図書館』刊行 2006（平18）…『これからの図書館像』発表（新たな図書館のあり方を提言/図書館の課題解決支援の機能を提示） 2008（平20）…図書館法改正	2005（平17）…奈良県立図書情報館開館 2006（平18）…千代田区立千代田図書、区新庁舎に移転、開館/指宿市立山川図書館指定管理者による運営開始 2009（平21）…小布施町立図書館開館
2010年代		2012（平24）…『図書館の設置及び運営上の望ましい基準』発表（図書館の課題解決支援の機能を提示） 2014（平26）…猪谷千香『つながる図書館』刊行	2011（平23）…武蔵野プレイス開館 2012（平成24）…紫波町図書館 PFIにより整備 2013（平25）…武雄市図書館・歴史資料館　全面改装・CCC指定管理による運営開始 2015（平27）…恩納村文化情報センター開館（観光に特化した図書館の誕生）/草津町立図書館「草津町立温泉図書館」に改称

参考文献：小黒浩司『図書・図書館史』（日本図書館協会、2000）、松本秀人『観光と図書館の融合』（北海道大学観光学高等研究センター、2010）、嶋田学「「訪れたい」「住みたい」と思う“まちづくり”に図書館ができること～第57回図問研大会・鼎談「まちづくり・観光・図書館」を振り返って～」（『みんなの図書館』、2010.12）等

「行っていない」が72・8％、今後の連携についても「予定はない」が67・9％と圧倒的に多かった。

2019年3月、「地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律案」の閣議決定により、「社会教育のさらなる振興はもとより、文化・観光振興や地域コミュニティの持続的発展等に資する」として、図書館、博物館、公民館等の公立社会教育施設を、自治体の判断により教育委員会から首長部局へ移管することが可能になった。しかし、この移管についても「検討する予定はない」との回答が90・1％を占めている。

現状では観光行政において図書館が施策の中で意識されることは少なく、図書館が地域の観光とほとんど結びついていないのが実情である。

近年、図書館の中には、地域住民だけでなく、地域外からの通勤・通学者にも広く門戸を開き積極的な利用サービスを提供することで、図書館の利用者が大幅に増え、地域住民の図書館に対する価値の再認識にもつながっているところも少なくない。この点からすれば、多くの観光客の来訪によって成り立っている観光地においては、多様な観光客（立寄客や宿泊客）が、地域住民と同様に、重要な利用対象として意識されてもよいのではないか。図書館が有する地域の知的財産は、観光地としての魅力の深掘りやその地ならではのツーリズムの展開、観光産業の振興等、様々な形で地域の観光の魅力づくりや活性化に寄与できる余地が大きいと考える。

おわりに

観光と図書館の連携・融合については、1918年、雑誌『ツーリスト』（ジャパン・ツーリスト・ビューロー）に、日本文庫協会（現在の日本図書館協会）の設立に尽力され、東京帝国大学図書館長を務めた和田萬吉氏が、「旅客の為めに図書館」を、1954年には、南益行氏が『図書館界』（日本図書館研究会）に「観光図書館論」を寄稿している（38頁コラム参照）。観光と図書館の連携・融合は、有識者により古くから指摘されている、古くて新しい課題であるとも言える。

前述のアンケート調査では、図書館の観光への寄与については「非常に思う（4・9％）」「思う（54・3％）」で約6割に上るなど、その可能性への期待を垣間見ることができた。本特集を、観光と図書館の連携・融合への意識の高まり、具体的な取り組みを誘導する一歩としたい。

（よしざわ・きよよし）

【参考資料】
・「観光と図書館の融合」（2010年7月1日、松本秀人、北海道大学観光学高等研究センター発行）
・「図書館概論 五訂版」（2018年12月20日、公益社団法人日本図書館協会発行）
・公益社団法人日本図書館協会ウェブサイト
・「現代思想12月号」（2018年12月1日、青土社発行）
・「専門図書館296号」（2019年7月、専門図書館協議会発行）
・「Consultant275号」（2017年4月15日、一般社団法人建設コンサルタンツ協会発行）

表3 観光と図書館に関するアンケート調査

図書館における観光客の利用（単数回答）	割合	回答数
1.想定している	14.8％	12
2.想定していない	64.2％	52
3.分からない	21.0％	17
N/A	0.0％	0
合計	100.0％	81

観光部署と図書館の連携（単数回答）	割合	回答数
1.行っている	25.9％	21
2.行っていない	72.8％	59
N/A	1.2％	1
合計	100.0％	81

今後の観光部署と図書館の連携（単数回答）	割合	回答数
1.取り組んでいく	4.9％	4
2.検討中である	25.9％	21
3.予定はない	67.9％	55
N/A	1.2％	1
合計	100.0％	81

図書館の首長部局への移管（単数回答）	割合	回答数
1.決まっている	0.0％	0
2.検討中である	2.5％	2
3.検討予定である	1.2％	1
4.検討する予定はない	90.1％	73
N/A	6.2％	5
合計	100.0％	81

図書館の観光への寄与（単数回答）	割合	回答数
1.非常に思う	4.9％	4
2.思う	54.3％	44
3.思わない	9.9％	8
4.全く思わない	0.0％	0
5. 考えてみたこともない	30.9％	25
N/A	0.0％	0
合計	100.0％	81

資料：（公財）日本交通公社

2

事例に学ぶ、図書館を活かした地域の観光魅力づくり

概説

近年、地域の活性化、まづくりにおける図書館の存在価値はますます大きくなりつつあるものの、地域の図書館と観光との関わりはまだまだ薄いのが実情である。そうしたなか、図書館の取組が地域の観光に寄与する事例も各地に散見されるようになってきた。

本特集では、特に図書館の観光活用という側面から代表的な事例を紹介する。それぞれの地域特性や課題をふまえた創意あふれる取り組みには、地域の観光に図書館が寄与していくための多くのヒントを見出すことができる。

Type A 観光対象・目的となる図書館

魅力ある図書館はそれ自体が観光対象・来館目的となりうる。

その一つは、図書館建築自体が観光魅力を有する場合である。地域の近代学校創立の先駆けとなった歴史的施設を模した高山市図書館（岐阜県）はその代表で、国内外の観光客も訪れる。図書館ではないものの、「本のまち」の拠点施設として本を介して新しい公共サービスを提供する八戸ブックセンター（青森県）は、書店など民間との様々な連携事業を通して人の交流を促し、域外からの来訪にもつながっている。

図書館のもつ特徴的な蔵書（コレクション）も来訪目的となりうる。近年は博物館や美術館などの文化施設等との複合化によって集客力を高め、相乗効果の高い地域文化の発信につなげている例も見られる。

Type B 観光客の滞在・時間消費の場となる図書館

旅行先、滞在先で、読書や郷土資料などを通した地域の風土・文化の探求、特色あるイベントや体験プログラムへの参加といった活動の場として図書館を利用するものである。

こうした利用は図書館、観光客双方においてまだ十分イメージされていないこともあり実例は少ない。恩納村文化情報センター（沖縄県）は、わが国で最も観光を意識した図書館づくりを行っているところの一つであり、村の観光振興にも大きく寄与している。奈良県立図書情報館（奈良県）も、周辺ホテルとの連携等を通して図書館を観光に活かす取り組みを進めており、県立図書館としてのあり方にも着目したい。

Type C 地域をつなぐ図書館

図書館だけで完結せず、地域と様々に連携することで地域の魅力の向上や観光の振興につなげるものである。

❶ **高山市図書館 煥章館** P10
管理 高山市
運営 ㈱図書館流通センター
開館 2004年4月
住所 高山市馬場町2丁目115
電話 0577-32-3096

❷ **八戸ブックセンター** P12
管理・運営 八戸市
開館 2016年12月
住所 八戸市六日町16-2 Garden Terrace 1F
電話 0178-20-8368

❸ **恩納村文化情報センター** P14
管理・運営 恩納村
開館 2015年4月
住所 沖縄県恩納村仲泊1656-8
電話 098-982-5432

❹ **奈良県立図書情報館** P16
管理・運営 奈良県
開館 2005年11月
住所 奈良市 大安寺西1-1000
電話 0742-34-2111

❺ **甲州市立勝沼図書館** P18
管理・運営 甲州市
開館 1996年11月
住所 山梨県甲州市勝沼町下岩崎1034-1
電話 0553-44-3746

❻ **小布施町立図書館** 愛称「まちとしょテラソ」 P20
管理 小布施町
運営 小布施町教育委員会 生涯学習係
開館 1923年11月
住所 長野県上高井郡小布施町 小布施1491-2
電話 026-247-2747

❼ **千代田区立千代田図書館** P22
管理 千代田区
運営 千代田ルネッサンスグループ
開館 1887年3月
住所 東京都千代田区 九段南1-2-1
電話 03-5211-4289

❽ **東近江市立八日市図書館** P24
管理・運営 東近江市
開館 1985年7月
住所 滋賀県東近江市 八日市金屋2-6-25
電話 0748-24-1515

❾ **伊那市立高遠町図書館** P26
管理・運営 伊那市
開館 1986年10月
住所 長野県伊那市 高遠町西高遠810-1
電話 0265-94-3698

❿ **愛知芸術文化センター 愛知県図書館** P28
管理・運営 愛知県
開館 1991年4月(移転・新築)
住所 愛知県名古屋市中区三の丸一丁目9-3
電話 052-212-2323

ここでは、ぶどうとワインをテーマとしたコレクション構築や企画展示など様々な取り組みを通して地域の産業や観光の繋ぎ役を果たしている甲州市立勝沼図書館（山梨県）、地域住民を巻き込みながら図書館の取組をまちなかにも展開する「まちじゅう図書館」の先駆けとなった小布施町立図書館（長野県）、人的サービスと地域連携展示により来館者と街をつなぐ拠点となっている千代田区立千代田図書館（東京都）の3例を取り上げた。

Type D 地域魅力を発信する図書館

地域の観光情報提供機能や、地域ゆかりのテーマによる図書コーナー、企画展示等を通して地域の魅力発信に寄与するものである。

事例には東近江市立八日市図書館（滋賀県）と伊那市立高遠町図書館（長野県）を取り上げた。前者は、図書館が主体的に関わり地域ならではの地域情報誌を発行しており、また後者は、携帯端末用アプリの活用、本をテーマにしたイベント、地域ファンを増やす文芸賞の創設など、単なる観光情報提供にとどまらない独自性の高い取り組みである。

ここに紹介した以外の取り組み例については46～47ページに一覧として整理した。合わせて参考にしていただきたい。

（旅の図書館 副館長 大隅一志）

❶

高山市図書館「煥章館」

情報発信の要として

煥章館館長　西田純一

観光エリアの中にある図書館のサービスとは

高山市図書館は、現在、本館と支所地域にある9館を合わせ10館で運営しているが、2006年4月以降は指定管理者制度を導入している。

本館は2004年4月に現在の位置（旧市役所跡地）に開館し、煥章館の名称で市民に親しまれているが、その名の由来は、明治時代、飛騨地域近代学校創立の先駆けとなった煥章学校にあり、「地域の輝かしい文化を築く拠点」という願いを込め「煥章館」と名づけられた。

煥章館の2階には近代文学館があり、高山市に縁のある近代文学者四人（瀧井孝作・江馬修・福田夕咲・早船ちよ）の作品をはじめ飛騨の歴史・文化に関する書籍を数多く所蔵し、高山市の文化についての調査・研究の場として活用されている。

一方で、煥章館は観光地飛騨高山の観光エリアに位置し、建物も擬洋風の風情ある景観を呈していることもあり、年間を通して国内外から多くの観光客が訪れている。館内の情報コーナーには、日本人観光客向けの観光パンフレットやまち歩きガイドマップをはじめ高山市を知ってもらうための多彩な資料を配置しているほか、外国人観光客向けにも11か国言語のまち歩きガイドマップを置くなど観光エリアにある図書館としてのサービス向上に努めている。

また、岐阜県出身の作家、米澤穂信氏の高山を舞台にしたライトノベル小説『氷菓』が2012年にテレビアニメ化、2017年には実写映画化されたが、アニメの中で、煥章館がその舞台のひとつになっていたため、現在でも聖地巡礼で煥章館を訪れる人が後を絶たない。

高山市の広い市域の中で、それぞれの地域が有する伝統文化や伝統工芸、また、各地域で新たに創造された文化を市民が共有し、さらには国内外から訪れる多くの人たちに情報発信する「要」の施設としての図書館の役割は極めて重要であり、情報発信施設としての機能を高めていくことが、高山市の観光文化の振興にもつながっていくものと考えている。

国内外への情報発信の取り組み

前述の趣旨に沿って、現在、高山市図書館が取り組んでいる事例をいくつか紹介する。

ひとつは、11月の伝統的工芸品月間に、1階正面の展示コーナーに国の伝統的工芸品の指定を受けている飛騨春慶（漆器）と一位一刀彫（彫刻）の作品とその関連書籍を展示し、高山市の伝統工芸への理解を深めてもらえるよう取り組んでいる。ちなみに岐阜県内には五つの国指定伝統的工芸品があるが、そのうちの2つが高山市内にある。

また、伝統的工芸品関係では、バイオリン製作などで世界的に有名なイタリアのクレモナ市の製作技術と飛騨春慶の卓越した漆塗り技術のコラボレーションにより製作されたバイオリン・ビオラ・チェロの春慶弦楽器による演奏会を名古屋芸術大学の協力により館内オープンスペースを活用して開催するなど伝統技術の融合により誕生した新しい文化の情報発信にも取り組んで

西田純一（にしだ・じゅんいち）
高山市図書館館長。高山市危機管理室担当部長、企画管理部長を経て、2017年から図書館。2019年から現職。

いる。

さらには、日仏交流160周年を契機として、昨年5月に岐阜県とフランスアルザス地方にあるオー・ラン県との友好交流が始まったが、オー・ラン県と同県内にある高山市の友好都市コルマール市の文化や風景等の同時展示を岐阜県、高山市と協力して行い、市民や観光客にフランスの文化や国際交流への理解を深めていただく機会とした。

また、ユネスコ無形文化遺産に登録され、日本の三大美祭、三大曳山祭とも呼ばれている春・秋の高山祭の時期（4月・10月）には、訪れた観光客などを対象に高山祭のミニ講座を1階オープンスペースで開催し、高山祭の歴史や祭屋台の特徴等への理解を深めてもらっている。

昨年度には、旅館・ホテル業従事者を対象とした英会話講座も、煥章館で開催した。

地域の生活文化も伝えていきたい

図書館の取り組みとして、国内外への飛騨高山の文化の情報発信等の事例をいくつか挙げたが、こうした創意工夫を凝らした多彩な取り組みを継続していくことで観光文化の振興に寄与ができると考えている。

煥章館の近くには、高山の歴史に関する資料を閲覧できる「飛騨高山まちの博物館」や一位一刀彫など伝統工芸の実演の見学や袴・着物の着用など伝統文化の体験ができる「飛騨高山まちの体験交流館」もあり、今後は、煥章館とこれらの施設が連携した取り組みを行っていくことで、その成果を一層高めることができると考えている。

しかし、これらの事例や今後の取組みは図書館や他施設への来館者を対象としたものであり、観光文化を今後さらに振興していくためには、こうしたサービスの充実に加え、食文化など地域の生活文化もコンテンツに加えた形で、SNSの活用などICT技術を駆使した情報発信の充実も必要であると考えている。

観光文化の振興に向けて

公共図書館には、地域への教育的・文化的な貢献という図書館法に基づく従来型の図書館の役割を基本としながらも、市民生活の課題発見・解決への支援や市民のサードプレイスとしての場づくり、地域コミュニティの活性化や安全確保への支援などいろいろな観点からの役割が求められており、全国の公共図書館においてもようやくそうした動きや試行的取り組みが出てきている。

煥章館においても複眼的な観点に立ち、いろいろな取り組みにチャレンジしているが、高山市が伝統文化を基調とした観光地であることを踏まえれば、観光文化の振興への寄与も当館に求められる重要な役割りのひとつであり、高山市が持つ有形・無形の伝統文化、さらには、地域の創造的な活動によって新たに生み出された文化芸術など高山市の観光資源の情報発信に、今後も創意工夫を凝らして取り組んでいきたい。

写真上）煥章館近くにある「飛騨高山まちの博物館」
下右）高山祭・祭屋台のミニ講座　（下中）フランス アルザス地方展・コルマール市展
下左）飛騨高山まちの体験交流館で一位一刀彫の体験

❷

八戸ブックセンター

人の交流を増やし、まちを元気にする

八戸ブックセンター・所長 音喜多信嗣

本に関する公共施設として代表されるものと聞くと、大半の人は図書館と答えると思う。

図書や郷土資料などを収集、整理、保存し、それを誰もが借りて読むことが出来るという図書館の役割は、地域の教育や文化の発展にとって必要な行政サービスである。

近年の全国的な傾向として、きめ細かな図書館サービスの提供のみならず、まちづくりや観光の観点から、図書館を核とした複合施設の整備などを背景に、図書館の数は増加傾向にある。

「本のまち八戸」構想の具現化

このような中、八戸市では、子どもから大人まで市民がもっと本に親しめる環境を目指し「本のまち八戸」構想を掲げ、年代に応じた各種事業を展開している。

これまでの図書館や各学校での読書推進の取り組みに加え、2014年度から、赤ちゃんとその保護者を対象に絵本の読み聞かせを行い、その絵本をプレゼントする「ブックスタート事業」を皮切りに、満3歳児をもつ保護者向けに、読み聞かせ絵本を購入するためのブッククーポンを配布する「〝読み聞かせ〟キッズブック事業」、市内の小学校全児童に、市内書店で使えるブッククーポンを配布する「マイブック推進事業」、市内小中学校への学校司書の派遣事業と、まずは子ども向けの事業を実施してきた。

そして、「本のまち八戸」の拠点施設として位置づけ、主に中高生から大人を対象とした施設として、2016年に「八戸ブックセンター」（市直営）を街なかに開設した。

図書館で本を借りて読むという体験と、書店で本を買って読むという体験は別のものであり、本を私有するという体験が重要であるという考えのもと、当センターで取り扱う本は、展示用の本を除き、全て販売している。

地方の民間書店では、海外文学や人文・社会科学、自然科学、芸術などの分野について、採算面から積極的には取扱いにくい現状となっている。

これらの本は、知的好奇心を刺激し、読書の幅を広げるきっかけとなるなど、市民の文化力向上にも寄与するものであるが、民間書店では扱いにくいため、当センターでは、これらの本を中心に扱い、また、本との「出会い」を大切にするため、図書館のような目的の本が探しやすい並べ方ではなく、提案・編集型の陳列により、「紙の本」との偶然の出会いを創出することを心がけている。

開館から2年以上が経過したが、「本を読む人を増やす」「本を書く人を増やす」「本でまちを盛り上げる」の三つの基本方針に基づき、特徴ある本の陳列・販売のほか、様々な企画事業を通して、「本」そのものや、「読む」、「書く」事がもっと市民の身近になるよう

紙から本ができるまで展2019。
1冊の本ができるまでの過程を展示

音喜多信嗣（おときた・のぶつぐ）
八戸市まちづくり文化スポーツ部まちづくり文化推進室八戸ブックセンター所長。1994年入庁。健康福祉部、経済部、総合政策部などを経て2016年からまちづくり文化スポーツ観光部まちづくり文化推進室。八戸ブックセンターの立ち上げに携わり、同年12月から現職。

に、また、「本」を取り巻く人の交流を促進することで、まちを元気に、盛り上げていくことを第一の目的として運営している。

これまでも、近隣の拠点施設（八戸ポータルミュージアム、八戸まちなか広場マチニワ）などとも連携して、作家などのゲストを招いてのトークイベントや、市民参加型の一箱古本市をメインとした「本のまち八戸ブックフェス」など、三つの基本方針に則った、数多くの企画事業を実施している。

なかでも、特徴的な事業として、1冊の本が出来るまでの過程を、館内のギャラリーで展示し、実際にその本を、当センターの企画として出版することを毎年恒例の企画としている。

1年目は八戸出身の作家・木村友祐氏の小説『幸福な水夫』（未來社）を、2年目は八戸の詩人・村次郎の選詩集『もう一人の吾行くごとし秋の風』（左右社）を、そして3年目は、八戸出身の写真家・中居裕恭氏の写真集『DUO 中居裕恭 森山大道』（bookshop M）を、デザイナー、印刷・製本会社、そして使用する紙は三菱製紙八戸工場に提供いただくなど、多くの方の協力を得て展示、出版してきた。

写真上）トークイベントなどの企画事業も多彩
下）ジャズをテーマにした棚

公共サービスの新しいかたち

また、市内の書店を始めとする民間企業の方々との連携も進めているが、「本」を切り口とした事業に、公共施設である当センターがうまく間に入ることで、民間企業同士のつながりも生まれ、市全体が本で盛り上がるという連携のかたちが出来つつあると感じている。

更には、最近では「本のまち八戸」が教育の現場にも浸透してきており、市内小中学校からの要請を受け、当センタースタッフのスキルをフルに活用して実施している出張トークやワークショップなどを通じて、児童・生徒たちの本に対する意識高揚が目に見えるようになってきている。

このように、八戸ブックセンターは、様々な企画事業を通して「本」にまつわる新しい公共サービスを提供する「本のまち八戸」の拠点施設となった。

2016年12月のオープンから、様々なメディアに取り上げられていることもあり、当初の見込みを超え、2018年は月平均1万500人（1日平均406人）の来館者数であった。

こうした本を介して人の交流を増やす試みは、もちろん八戸市民のための取り組みであるが、結果として出張者や観光客からも高い評価を得て、当市への来訪者を増やす一助となっている。それは日々接する来館者からの声や、アンケートへの回答の半数ほどが市外からの来訪者によるものだったことからも実感としてある。

今後も、民間書店・図書館・市民団体など関係各所との話し合いを重ね、本に関わる人たちとともに、公設の書店としての八戸ブックセンターを通して「本のまち八戸」を推進し、市民が誇りに思え、市外からの来街者にもその意義が伝わる、文化の薫り高いまちづくりをしていきたいと考えている。

❸

恩納村文化情報センター

村の基幹産業である観光と図書館の融合

割引クーポン券

恩納村は、沖縄本島のほぼ中央の西海岸に位置する。人口1万人の小村でありながら、大型のリゾートホテルを中心に、沖縄本島の宿泊施設（ホテル・旅館）収容力の約2割が集積する県内屈指の観光・リゾートの村である。恩納村文化情報センターは、それまで図書館がなかった村にとって、村民が長らく待ち望んだ施設として2015年4月に開館した。

同センターは、「恩納村に関するあらゆる情報を収集し、村内外へ発信する」ことを目的とした、観光情報提供機能と図書館機能を備えた複合施設で、計画当初から観光客の利用を強く意識した施設づくりをしている。

施設の検討・準備段階から中心的に関わり、現在も運営の現場を牽引する同センター係長の呉屋美奈子氏に話を伺った。

文化、知識、観光への架け橋に

恩納村文化情報センターは、既存の図書館のイメージにとどまらず、当初より村の基幹産業である観光にも寄与する施設を目指して整備された。バス路線でアクセスしやすい国道58号線沿いであることを条件に、北部観光への入口となり、既存施設の集客効果も期待できる場所を慎重に検討し、村南部仲泊地区の「おんなの駅なかゆくい市場（農産物物販センター）」が隣接する位置に、恩納村博物館（2001年開館）に併設するかたちで整備されたことも、村民と同時に観光客の利用を考慮したことによる。

観光立村である恩納村の大きな目標の一つは、宿泊滞在数を1日でも延ばすことにもある。また雨天時の対応や、マリンアクティビティだけではない観光ニーズの顕在化といった村の観光課題への対応策も、同センター整備に当たって話し合われた。

「私たちの目標の一つは『るるぶ』や『まっぷる』などのガイドブックに載ること。図書館も観光情報発信を担う施設として充分に力を発揮できると考えています。」と呉屋氏は語る。ガイドブックに載ることで観光客も立ち寄ってくれ、それによって恩納村の魅力を発信できるようになるからである。

観光客に利用しやすい施設とサービス

施設は3階建て（延べ面積1・689㎡）で、1階：観光情報フロア、2階：図書情報フロア、3階：展望室で構成されている。

1階の観光情報フロアは、「恩納村および沖縄北部へのゲートウェイ」として位置づけられ、観光協会から配置された2名の「旅の案内人」が村内および北部観光地、観光施設の情報提供を行っている。フロアには、単なる観光案内機能にとどまらず、「キオクボード」（村民と一緒につくる地図）や「キオクバンク」（村民・観光客参加型のフォトアーカイブ）、「マップナビ」（村内および沖縄北部を楽しむための最新情報を紹介する壁面の大型マップ）など様々な工夫がなされ、〝村民とともに恩納村の魅力を発信し、ともに分かち合う〟文化情報拠点の創出を図っている。

一方、2階の図書情報フロアは、窓際の閲覧席から美しい沖縄の海や夕日が楽しめ、リゾート地ならではの図書館としての魅力を持っている。また利

取材に応じてくれた
呉屋美奈子氏

用サービスや蔵書にも観光客を意識した図書館づくりをしている。たとえば、利用者カードには「村内在住・在学・在勤者」用と「村外在住者」用の2種類があり、全国どこに住んでいても本を借りることができる。県外登録者はあと数県で全国を網羅するところまできているという。

また恩納村・沖縄県の郷土資料を揃えた「郷土書コーナー」には、沖縄の旅の本を集めたコーナーもある。ホテルのパンフレットやイベントチラシなどを過去のものも含めて収集したパスファインダーも充実しており、長い目で見れば村内ホテルのアーカイブ資料としても貴重である。郷土資料の収集など村民のために行うサービスが、結果として観光客に向けたサービスの向上にもつながっている。

1階の観光情報フロア

海の見える閲覧席

ホテルに設置された「ミニライブラリー」（ANAインターコンチネンタル万座ビーチリゾート）※画像提供：恩納村文化情報センター

観光施設、宿泊施設との連携

周辺施設との連携も積極的である。本を借りると隣接する「おんなの駅」の商品が5％割引される「割引クーポン」はその代表である。センターで本を借りた後利用者がおんなの駅へ、おんなの駅で買い物後クーポンを求めてセンターへ、という双方の利用促進につながるユニークなサービスである。

一方、村内の大型リゾートホテルとの連携では、ミニライブラリーの設置がある。センターの蔵書数十点を一定期間（半年～1年程度）貸し出すもので、センターでは本の選書や図書レイアウトのアドバイスなどを通してホテルのサポートを行っている。

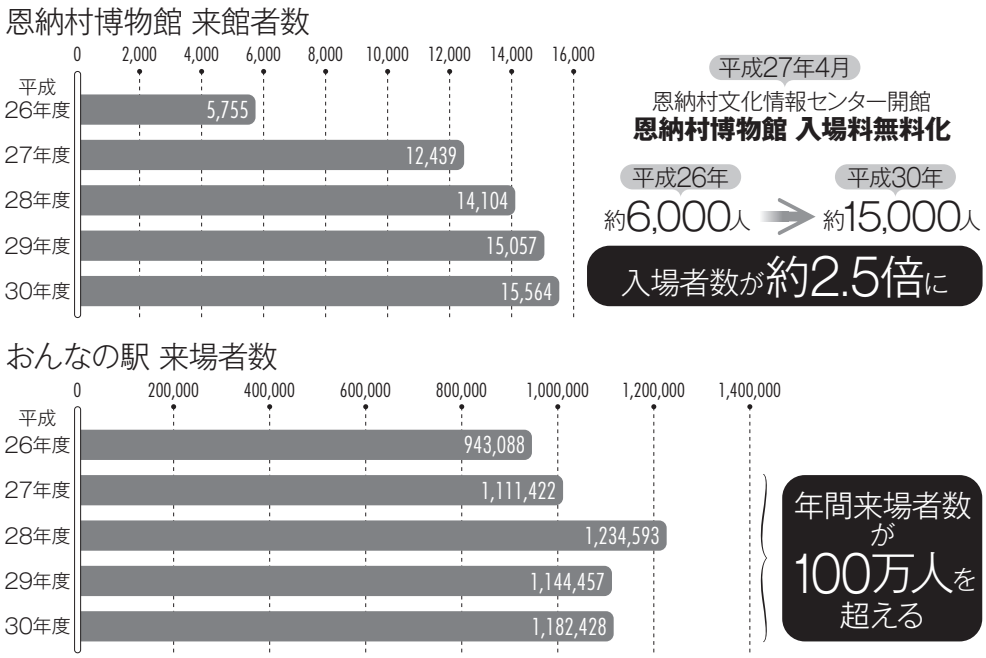
図書館と観光の融合により発揮された相乗効果

恩納村文化情報センターの来館者数は、当初の目標を上回り、開館初年度2015（平成27）年度の約6・8万人から、2018年度は約8・9万人へと着実に増加している。また、センターの開館による周辺施設への相乗効果も大きく、併設する博物館の入場者数は約2・5倍に、また「おんなの駅」の年間来客者数も100万人を大きく上回るまでに増加をみている。

観光に特化した図書館を目指す恩納村文化情報センターは、村民と観光客がともに村の魅力を再発見し魅力を発信するとともに、観光振興にも寄与する重要な存在となりつつある。

取材・文：大隅一志

図1 **周辺施設（おんなの駅・博物館）入場者数の推移**（資料：恩納村文化情報センター）



❹

奈良県立図書情報館

持っている資源を観光に活かす

奈良県立図書情報館 図書・公文書課 課長 乾 聰一郎

ホテルに本を貸し出すこと

奈良県立図書情報館は、観光地奈良にあって、数多くの観光施設があるなかで、図書館が観光にどのように関わることできるかということは、開館以来の課題のひとつであった。当館は、駅前や観光地に隣接するといった立地ではなく、また、観光地を回るルートに近接しているわけではないので、来県する観光客が直接来館するということはあまりない。そのような条件のなか、図書館のリソースをどのように観光に活かすかのひとつの試みとして、2008年から始めたのが、当館の最寄り駅のひとつJR奈良駅にある、ホテル日航奈良に対する本の特別貸し出しである。現在でも、毎年度末にその年の奈良県内の行事、催事などをキーワードに、また、ホテル側からの要望も聞きながら、20～30冊の本を選書し、各本に簡単な内容コメントをつけてホテルに貸し出している。ホテルでは、貸し出し文庫「都読 - koyomi -」と名付け、ブックリストを作成し、全客室に配置している。宿泊客から閲覧希望があれば、職員がその本をフロントから客室まで持っていくことになっている。ホテルのウエブサイトでも、宿泊の各種サービスの貸出備品のページで案内されている。

https://www.nikkonara.jp/stay/service/

ホテルでは、毎月の各書籍の貸出数を記録しており、毎年の集計は当館にも提供され、次年度の選書の参考にもしている。このデータは宿泊される方の情報ニーズや求める本の傾向が見えて興味深い。例えば、観光案内書や歴史書などより写真集を希望する利用者が多いことなど、この文庫を更新していくうえで参考になる点も多い。

ホテル日航奈良の貸出文庫リストとリリース資料

連携すること

この取り組みが縁で、2009年～2011年と2015年に当館で開催された、「自分の仕事を考える3日間フォーラムⅠ～Ⅲ」とその番外編「ひとの居場所をつくるひと・フォーラム」（3日間）では、ホテル日航奈良が、このフォーラムの宿泊プラン（フォー

ホテル日航奈良の客室のリスト

乾 聰一郎（いぬい・そういちろう）
奈良県立図書情報館 図書・公文書課課長。1999年から奈良県教育委員会事務局で新県立図書館（現奈良県立図書情報館）の建設準備に携わる。2005年の開館後は、企画展示・フォーラム・コンサート等のイベント・主催事業や国内外の団体等との連携事業等の情報発信事業に取り組む。2017年4月から現職。

ラムは有料イベントだったので、宿泊の特別料金を設定し、フォーラム参加チケットを付けるというもの）をつくり、当館との連携イベントとしても開催することができたものである。このフォーラムは、全国から1日300人～400人が参加するイベントで、宿泊者も多く、近隣のゲストハウスなども若い参加者で賑わったと聞いている。フォーラム会場では、観光情報の提供（奈良関係本の紹介やパンフレット配置など）や参加者からお店などの口コミ情報の交換ボードの設置なども行った。県外からの参加者の多くが、フォーラムの合間や終了後に観光地を訪れたようである。ホテルとの連携はもとより、地元にも、ささやかながら貢献することができたのではないかと思われる。

また、不定期ではあるが、全国の都道府県立図書館等と連携し、お互いの観光ポスターやパンフレットを交換し、その地域の関係本とあわせて展示する図書館交流展示も開催している。当館ではこれまで、秋田県、宇都宮市、高山市、三重県、福井県、和歌山県、島根県、宮崎県、沖縄県などの図書館との交流展示を行った。双方で、相手の観光アピールを行うとともに、関連本の展示によって、互いの地域情報や関連の知見などを紹介することができる。また、共通のテーマや話題があると、一層興味関心を喚起できる。例えば、平城遷都1300年関連で平城京造営と飛騨の匠の関係を扱った高山市との展示や古事記1300年を共通テーマにした宮崎県との交流展示などがそれにあたる。ちなみに、当館からは、最新の観光ポスターだけではなく、1954年以来、年に1回、奈良県・奈良市・西日本旅客鉄道(株)・近畿日本鉄道(株)・奈良交通(株)の5者共同で制作される観光客誘致ポスターである奈良大和路仏像ポスター（今年度で98作品となる）をセレクトして相手館で展示しているが、非常に好評である。

写真上）交流展示（秋田）
下）自分の仕事を考える3日間

「地産地消の観光」という発想が、情報発信の基盤

以上、これまで当館が行ってきた図書館を観光に活かす試みを紹介した。ホテルへの特別貸し出しは、来館者への資料提供ではないにしても、一時でも奈良に滞在する人々への間接的な図書館利用となっているであろう。また、県外来館者を呼び込むイベント開催は、ホテル、ゲストハウス、飲食店、書店など、地元へのささやかな貢献になっているのではないかと思われる。さらに、交流展示を通じて、双方の地域への関心が高まり、足を運ぶ方々が増えることにもつながるのではないかと思われる。図書館が、様々な切り口で資料や情報を（また人を）再編集し、人々の潜在的な好奇心や関心を触発するために、どうアプローチするのか、観光もまたひとつの切り口であり端緒となるのではないだろうか。

※私見ではあるが、このような図書館からの情報発信は、県外から（あるいは海外から）来県する人々に向けてだけではなく、地元の人々にもアプローチする必要があると思われる。地元の人々がその地域の重層的な歴史や知識を持っているわけではないので、地元の人々向けの地元の観光、地産地消の観光ともいうべき発想は、外への発信の基盤となるのではないか。自らを知り、地元への理解や共感の共有こそが、新たな観光資源や観光のあり方を見つけ出すことへと繋がるのではないだろうか。そして、地元の資料・情報を蓄積している図書館こそが、まさしくその発想を支え、発信する場なのである。

※このことは、大阪を拠点に活動する観光家／コモンズ・デザイナーの陸奥賢氏から多くの示唆を得ている

❺

甲州市立勝沼図書館

ワイン王国の歴史と産業を繋いでいく

甲州市立勝沼図書館司書　古屋美智留

歴史と資料をツナグ

JR勝沼ぶどう郷駅を降りると、眼下に広がる葡萄畑。なだらかなこの扇状地は、葡萄の葉でおおわれている。ここ勝沼は日本屈指のブドウ産地、ワイン産地である。その歴史は深く、武田信玄の時代以前に山梨県固有種である「甲州ぶどう」が大陸より伝わり、栽培が始まったとされる。甲州ぶどうの発祥については「大善寺のぶどう伝説」と「雨宮勘解由伝説」の二種類があるのも産地ならでは。明治には村の青年、高野正誠・土屋龍憲の2人が県令の命を受けてワインの醸造を学ぶためフランスへと旅立ち、現在まで「ぶどうとワイン」の歴史が続く場所である。

甲州市立勝沼図書館は23年前、合併前の勝沼町に「ぶどうの国資料館」として設立された。開館当初から、スタッフの熱意と「地域に根差した図書館であろう」とのコンセプトのもと、地域の基幹産業である「ぶどう・ワイン」の資料収集・提供・保存を、この地の図書館としての目標に掲げた。以来、ワイナリーの密集地でもあることから、研究書や関連洋書などの収集も行い、各農家・会社などに眠る資料の寄贈も呼び掛けた。開館当初は約3万点であった資料数も今は約12万点、うち約3万点が『ぶどうとワイン』の資料となった。内容は多岐に渡り、一般流通している書籍・雑誌資料はもちろんのこと、図書館ではあまり置くことのないソムリエ・ワインアドバイザーの教本や試験問題集、農業資料、葡萄酒技術研究所資料、ソムリエ会員雑誌、学会誌だけではなく、貴重資料の農書、物品資料として「ブドウの葉の拓本」も所蔵。最近では市文化財課と協力体制を組み、貴重な資料データの共有、デジタルデータ化なども進めている。

写真上）館内の展示は毎月変わる。季節、本の内容などテーマは様々。下）図書館を起点としたフットパス・コースマップ。その大きさはA0サイズ。

専門書も多く所蔵しているということで、県内外ワイナリー、ブドウ農家、そして多くのワインファンが歓喜する場所でもある。「勝沼図書館の閲覧室で、よく勉強しましたよ。」以前取材に行った、日本トップクラスのワインアドバイザーさんから言われた一言が全てを物語っていると感じる。

地域観光とツナグ

20年以上つづく『ぶどうとワインの資料展』は、毎年テーマを変えて10、11月の2か月間開催しているが、この資料展の裏テーマは「地域再発見」である。地域資源「ぶどう・ワイン」を軸に繋がり、広がっていく人々、産業や時代のニーズ、歴史の中で先人が残

古屋美智留（ふるや・みちる）
甲州市立勝沼図書館司書。1995年塩山市役所（現・甲州市役所）入庁。教育委員会教育総務課学校図書館担当を経て2011年度から生涯学習課図書館担当となる。勝沼図書館開館以来 20年以上にわたり、館の特徴であるぶどうとワインに関する資料収集と地域研究、毎年実施している「ぶどうとワインの資料展」に携わる。

した文化と次世代への継承などを知ってもらうことで、もう一度地域を見直す・誇りを持ってもらうことを意識しながら、今日まで行ってきた。

資料展のスタート時は手探りであったため、自館資料、新聞記事などからテーマを見つけて行ったが、近年日本ワインの注目度やその年の新しい情報をキャッチするため、スタッフが取材へと出向くようになった。『資料展』として厚みを出したのが9軒のぶどう農家から畑の土を採取させてもらった、いわゆる「テロワール」を扱った資料展である。同品種でも栽培方法に違いがあること、土壌の違いなどを聞き取りと調査で行い、パネルと関連書籍・資料を並べ展示を行った。ぶどう・ワイン関連図書はもちろん、自館の所蔵資料を幅広く知ってもらえることも意図して展示を行っている。「甲州ワンとルーツ」「ぶどう伝搬と現在の新種」「地元でワイン文化を繋ぐ人々」など、テーマには事欠かない。

企画するうえで気を付けているのは、一般目線を忘れないことだ。専門資料展は、好きな人には大変喜んでいただけるが、そうではない方にはなかなか受け入れてもらえない。我々は本のエキスパートであってワインのエキスパートではないので、興味の入り口となるよう心掛けている。近年、ワインツーリズムとの連携事業も大きなものとなり、今では資料展用の観光マップに図書館を掲載していただいている。受付では「ワインのことをより知ってからまわるのも大事なことですよ」と、声をかけてくれている。

写真右上)資料展のあゆみを紹介。中)2018年度の資料展。展示は美しさと世界観を大事と考える。右下)資料展で配布する冊子。全て手作り。左下)新聞のクリッピングファイル。68冊め。

来館され、資料の説明を聞くだけではなく書籍を借りていかれる参加者もいる。特に自館資料として作成している、市内全ワイナリーのファイルが大変喜ばれる。このファイルには、各社のパンフレットだけではなく、図書館に所蔵していない雑誌の記事、地方紙の記事、広告などを入れ込んでいる。「ブドウ県内・県外」「ワイン県内・県外」の4種を、新聞のクリッピング資料収集も行っているが、ワイナリーファイルとともに、それぞれのアーカイブ資料として活躍している。また地域の観光も合わせて紹介できるマップもあるため、観光案内の役目も果たしていると感じる。

多方面からツナグ

紙資料をベースとする図書館では、基本飲食が禁止である。しかし、これだけ『ワイン』の資料を持つ図書館としては「味を知ってもらうこと」が必要だった。そこで企画したのが地元ワイナリー若手集団の話を聞き、試飲を行うイベント。その日の夜だけ、貸出カウンターはバーカウンターへと変化する。今ではすっかり定着し、地元の野菜ソムリエが出す「合わせ」を食しながら「産地ワイン」と「醸造家の話」、「資料」そして「ワインにあう音楽」を楽しむイベントとなった。

貸出カウンターで試飲。飲みながら醸造家に直接話を聞けるという贅沢なイベント

図書館のイメージは「書籍を借りる」ことだろう。しかし本来、様々な資料が揃っている図書館だからこそ、多角的な繋がりが持てる場所だと思っている。もちろん、飲食や音楽にも。勝沼図書館は地域産業に特化した資料収集を行っているため、観光とも結びつくことができる。以前、勝沼のワインの歴史をお客様に聞かれたワイナリーの方が話してくれた、「勝沼図書館に行けば全部わかるよ」。この言葉とともに、全てをツナグ、全国の葡萄・ワインファンに愛される、地元『勝沼』の根を支える、唯一無二の図書館でありたい。

❻

小布施町立図書館

「栗と北斎と花のまち」の「まちとしょテラソ」

小布施町立図書館事務長　市村勝巳

来館者は旧図書館の4倍、町民の利用は40％

小布施町は長野県北東部に位置し、面積は19㎢と長野県で最も小さな町である。人口は1万1000人ほどである。主産業は栗をはじめとする果樹栽培を中心とした農業である。江戸時代後期に、小布施には豪商の招きで葛飾北斎や小林一茶など文人墨客が訪れ、昭和50年（1975）代以降その遺産を起点とした町並み修景事業が進められてきた。また、ここ20年ほどは官民一体となって花づくりに取りくみ、現在は「栗と北斎と花のまち」として年間100万人以上の観光客を迎えている。

当館は1923年に創立した。利便性の改善と電算化導入を契機として、1998年から町民主体の新図書館建設が始まり、2009年7月に現小布施町立図書館〝まちとしょテラソ〟（以下、「テラソ」）として開館した。別称「テラソ」とは闇夜の町を「照らす」行燈（あんどん）のような施設を指し、町民からはテラソの愛称で親しまれている。2011年には町民主体の図書館づくりが評価され、ライブラリー・オブ・ザ・イヤー大賞を受賞、『日本の最も美しい図書館』（2015エクスナレッジ）など多くの出版物で紹介された。

テラソ開館以降、年間の来館者数は旧図書館の4倍となる14万人前後で推移している。蔵書数は約10万冊、図書貸出し利用者のうち町民が40％を占め、周辺三市一村住民の利用が多い広域圏型図書館である。建設時の基本構想では、テラソが「学びの場・子育ての場・交流の場・情報発信の場」となるようビジョンが示された。このうち、観光面については、来訪者と住民との交流支援及び集積した町内関連刊行物による町内情報発信を担うとした。

図書館員は町のコンシェルジュ

テラソでは前述の基本構想を受け、一つに、カウンターは通常業務のほかコンシェルジュとしての機能も有している。観光地図の配布と案内、美術館共通券や開催行事入場券等の販売など丁寧な対応を心がけている。二つに、蔵書では町内刊行物のほか、小布施の先人、小布施縁の葛飾北斎や中島千波氏等、町出身者の関連出版物コーナーを設けるなど地域に係る情報集積に努めている。また、先人のひとりである豪商高井鴻山が好んで描いた妖怪関連図書を多く選書するなど工夫を凝らしてきた。三つに、HPでは江戸時代の小布施村中心図を「小布施ちずぶらり」に掲載し、観光客が現地で対照して歩くプログラムを提供している。その他、多文化共生への配慮から館内NDC（日本十進分類法）には英語表示を併記する等改善してきた。

町じゅうが図書館、町全体がガーデン

小布施では花をとおして観光客をはじめ来訪者との交流を図るため、2000年より町民が庭園を開放する「おぶせオープンガーデン」に取り組んできた。現在130軒のガーデンオーナーが参加している。この事業を参考に、当館設計者の古谷誠章氏らの発案をも

市村勝巳（いちむら・かつみ）
小布施町立図書館事務長。教員として長年総合学科高等学校においてキャリア教育に携わる。全国総合学科高等学校長協会常務理事、北信越地区総合学科高等学校長協会会長、長野市教育委員会事務局主任指導主事など経て、2019年から現職。専門は古代史。

とに、2012年に「まちじゅう図書館」を開始した。「本とつながる、人とつながる」をコンセプトに、商店や個人宅で所蔵図書をその一角に並べ、訪れる町内外の人が自由に本を手に取り、店主（館長）とのふれ合いを楽しむ仕かけである。銀行・郵便局・酒屋・味噌醸造店・食堂・個人宅など現在16館が加盟し、事業者毎に特色ある図書や雑誌が並んでいる。各館共通の運営規約はなく、館の運営は館長の方針に委ねられており、なかには貸出しや持ち帰りを認める館もある。テラソから認定旗を配布するほかには行政的支援はしていないが、各館を紹介する地図を配布している。「まちじゅう図書館」は、本を介した館長と町内外の人とのつながりから新たな交流や空間を創出する効果が期待され、オープンガーデン同様に小布施観光の特色のひとつとなりつつある。

今後の小布施観光とテラソの課題は

テラソは小布施駅から徒歩二分の位置にあるため、土産物を携えた観光客が立ち寄り、本を手に取る姿が見受けられる。また、観光協会の小布施ボランティアガイドによる町内ガイドコースにテラソが加わることがあるため、視察や見学を含めた多数の町外訪問者がある。テラソにはコンシェルジュとしてのガイドや、小布施に関連する図書・雑誌・視聴覚資料等を活用したレファレンスサービスの提供と情報収集が求められており更なる充実に努めたい。一方、観光協会との連携と情報交換、まちじゅう図書館を繋ぐセンターとしての役割の検討などが今後の課題となっている。

（上）まちじゅう図書館「かねいちくつろぎサロン」
（下）テラソは、「学び」「子育て」「交流」「情報発信」の4つの場

千代田区の観光案内にも対応しているコンシェルジュ・ブース

❼

千代田区立千代田図書館

人的サービスと地域連携展示で、来館者と街をつなぐ拠点づくり

「図書館コンシェルジュと巡る神保町ツアー」のツアー風景

街案内が月に100件以上館内コンシェルジュが活躍

東京都千代田区の区立図書館の中央館である、千代田図書館は「本の街」として知られる神保町の近くにあり、10階建ての区役所庁舎の9階全部と10階の一部を占めている。2007年5月に同庁舎の移転・新設に伴ってリニューアルオープンしたが、その時から導入され、この図書館の大きな特徴となっているのがコンシェルジュサービスだ。

本探しの手伝いや館内の総合案内だけでなく、「ここから東京駅へはどう行くのか」「神保町でこの分野を扱う古書店はどこにある?」といった案内、「この辺で美味しいランチの店は?」「近くにある観光スポットを教えて」などの、区内観光に関する質問にも幅広く対応している。こうした街案内の件数は月平均80件以上を数えるという。

コンシェルジュは現在5名おり、司書資格は不問でコミュニケーション能力が重視される。千代田図書館はリニューアル当時から指定管理者制度が導入され、3つの民間会社が役割を分担して運営しているが、この中でコンシェルジュを担当するサントリーパブリシティサービス株式会社は、もともとサントリーのビール工場見学の案内業務からスタートしている会社であり、そうした接客のノウハウが生かされている。

「新人コンシェルジュでもスムーズに対応できるよう、過去の質問対応をデータベース化して情報を共有しているほか、観光に関する詳しい質問は千代田区観光協会に問い合わせるなどの横連携も行なっている」と、千代田区立図書館広報室チーフの坂巻睦氏は語る。

神保町を巡る図書館発ツアー参加者の7割が千代田区外から

館内だけでなく街案内も行うというのは図書館としては異色のサービスだが、実施理由として「千代田区民は6万5千人なのに対し、区の昼間人口はその14倍に当たる約85万人。千代田図書館も在勤在学している区外在住の方の利用が多く、図書館を拠点として、そうした方にもっと千代田区を知っていただきたい」（坂巻氏）という考えがベースにある。

リニューアルする千代田図書館の指定管理者を募集するにあたり、区が強く求めていたのが地域との連携だった。この意向を受けて、千代田図書館の指定管理者が提案したのが、人を介した地域情報の収集と提供を行う「コンシェルジュサービス」というアイデアだ。この提案をサントリーパブリシティサービス株式会社が具体化し、図書館内の案内だけでなく、図書館の外の地域も案内するコンシェルジュというサービスが生まれた。

コンシェルジュの役割はその後さらに広がりを見せ、リニューアルオープン翌年の2008年10月から「図書館コンシェルジュと巡る神保町ツアー」がスタートした。古書店や建築物巡り、映画ゆかりの地巡り、雑誌「散歩の達人」とのコラボ企画など、ツアーのテーマはさまざまで、コンシェルジュた

ちが企画内容を考えている。

中でも好評だったのが、喫茶店をテーマとしたツアーで「神保町の老舗喫茶店『さぼうる』で、オーナーに話を聞きながらメニューをいただくという内容。若い参加者が多く、参加者同士のコミュニケーションも活発だった」（坂巻氏）。

ツアーは年2回開催されており、定員20名程度で参加費は無料。区内在住・在勤であるかは問わず、高校生以上ならどこに住んでいても参加できる。定員が毎回すぐ埋まる人気企画で、参加者の7割は区外在住者で占められ、テーマによって参加者の顔ぶれも変わるという。この取り組みは、千代田区の魅力を区民だけでなく、区外に住む人々に広く伝えることに一役買っていると言えそうだ。

上）「地域連携コーナー」では千代田区に関する展示を1～2ヶ月ごとに入れ替え。7～8月は怪談がテーマだった

右上）ブースのデスクには、コンシェルジュが作成した区内の飲食店情報の手作りガイドが置かれている

下）区内の出版社と大学の協力による展示「～書評キャンパス～いまどきの大学生 解体新書」

「地域連携」展示コーナーも常設 博物館・美術館との連携を強化

千代田図書館内には2カ所の展示コーナーがあり、どちらも2～3ヶ月ごとに内容を変え、常時展示を行なっている。1カ所ではこれまで「としょかんのこしょてん」というタイトルで、神田古書店連盟との連携による古書店街や古書関連の展示が多く開催されていた。今年4月からこの展示コーナーには「地域連携コーナー」という名前がつけられ、古書関係に限らず、より幅広く区内の事業者や観光スポットなどをカバーする。

「区内の美術館・博物館との連携にも改めて力を入れていく意向」（坂巻氏）とのことで、今年8～10月は「この秋、美術館の建物を楽しもう！」というテーマを掲げ、千代田区にある3つの美術館、東京国立近代美術館工芸館、東京ステーションギャラリー、三菱一号館美術館について紹介している。

もう1カ所の「展示ウォール」という展示コーナーでも、区内の出版社と協力するなどやはり地域との連携による展示が行われている。今年8～11月は「～書評キャンパス～いまどきの大学生 解体新書」と題し、神保町にある株式会社読書人と連携して明治や上智、共立など区内にある大学の学生が書いた書評と本を展示している。

こうした展示やコンシェルジュサービスなど多角的な取り組みを通じ、千代田図書館は千代田区の情報発信拠点として大きな役割を担っていると言える。

（取材・文：ライター 井上理江）

❽

東近江市立八日市図書館

まちの魅力を集めて発信 ～地域とつながる図書館づくり～

東近江市立永源寺図書館館長 山梶瑞穂

東近江市立図書館が大切にしていること

近年、図書館を人が集まる「にぎわい拠点」や「観光施設」として捉える動きがある。しかし、図書館はひとづくりを支える「教育施設」である。図書館として一番大切なことは、市民の要求に応えるだけの資料を整備できているか、利用者と資料を結ぶ有資格の専門職員（司書）がいるか、人と人、人と資料が出会う快適な利用環境が整えられているかといった基本的要件を満たしているかどうかである。

元気で活気あるまちづくりを実現するためには、そのまちに暮らす人々が元気であらねばならない。「まちづくり」は「ひとづくり」からなのである。「よりよいまちづくりとひとづくりを進める図書館活動の推進」を実現するための手立ての一つとして、私たちは6年前から図書館外の人々とともに地域情報誌「そこら」を発行している。それについて紹介したい。

地域を知ることの大切さ

地域に根差した質の高いサービスの実現には、職員が地域のことを深く知ることが大切であり、そのために職員が地域に出ていくことが欠かせない。目を凝らし、耳を澄ませば、内からだけでは見えない地域の課題や日々の様子が見えてくる。見聞きしてきたことや経験は、図書館サービスの根幹を支える選書に必要不可欠な情報となる。

また図書館資料の中で大切な郷土の歴史資料や行政資料などは出来る限り幅広く収集しているが、改めて書架全体を見渡すと「地域の今」を扱った資料が少ないことに気付かされる。地域の今の課題は何か、どんな動きがあるのか、どんな人がいるのか、それを知る有効な資料が殆ど無いのである。無いならつくればよい。これがリトルプレスづくりを始めたきっかけだった。

地域情報誌「そこら」の誕生

以前から、「地域の今」と「地域の魅力」を発信したい、という職員たちの思いはあった。

つくるにあたって、図書館に編集などのノウハウはある、でも印刷費は無い、広く情報を集め記事にしたい、等々の思いから、図書館以外の人や機関と連携することとした。

東近江では「総寄り」と言う、市民

「そこら」創刊は2014年3月。以来、毎年1回の発行を守り続けている

山梶瑞穂（やまかじ・みずほ）
東近江市立永源寺図書館館長。1995年滋賀県湖東町入庁。2005年の市町村合併に伴い、東近江市立八日市図書館に。その後、東近江市立能登川図書館を経て、2015年八日市図書館副館長、2019年4月から現職。

や各種団体と行政職員がゆるくつながるまちづくりのネットワークがあり、図書館職員も参画している。年数回の懇親会では「総寄り」のメンバーが一同に会し、何かのときには協力しあえる頼りになる仲間を見つけることができる。この「総寄り」で出会った市役所の「緑の分権改革課」（当時）の職員が、地域で活躍する人々を紹介する冊子を作っていた。その冊子をリトルプレスに発展させようと意気投合したのが「そこら」の始まりである。ちなみに「そこら」とは近辺をあらわす方言「そこらへん」を略したもので、地域の魅力を、まず地元の人に知ってもらいたい、という思いから命名した。

リトルプレスづくりの現場から

「そこら」は現在、年1回のペースで発行している。当初は取材に行っても断られたり警戒されることが多かったが、号を重ねるにつれ認知度が高まり、市民の協力も得やすくなっていった。

図書館には今も予算は無いが、「そこら」の高い情報発信力に期待を寄せ、経費を負担してくれる市役所内の課や団体が現れた。2号がNPO法人「まちづくりネット東近江」、3号が市総務課、4号は「東近江エコツーリズム推進協議会」、5号は「ローカルサミットin東近江実行委員会」、6号は市観光物産課。そして現在編集中の7号は市広報課が予算を確保してくれた。

資金面だけでなく、市の職員は編集委員として協力してくれるようになった。6号からは地元新聞の関係者やフリーのカメラマンも参加している。皆、楽しんで携わり、編集会議はいつも和気あいあいとしている。

「そこら」では、執筆者自身が必ず体験や取材し、記事にする。記事や写真の使いまわしはしない。幻のイヌワシを探して厳冬の山を登ったが見つからなかったことや、SUPという湖上で楽しむスポーツでは何度も冷たい湖に落ちたりした経験も記事にした。そして取材した人には必ず、東近江市のおすすめスポットを教えてもらっている。それが隠れたスポットであったり風景だったりすることがあり、取材する我々も興味深い。

「そこら」は市の様々な場面で活躍している。市観光物産課はまちの魅力を市民や都会の人々に伝える場で配布している。広報課は市内の各高校に「そこら」を持参してPRし、新たな書き手＝高校生ライターを生んでいる。森と水政策課では2017年度に本市で開催された「ローカルサミット東近江」の様子を伝える場として「そこら」を活用した。

「そこら」取り組みの成果

「そこら」の直接的成果は、取材を通じて得た情報を選書に活かせたことや、魅力的な催しや展示につなげたことであるが、より大きな成果は、人的ネットワークの拡大である。地域の活動に欠かせない大きな財産となった。

「そこら」を毎号心待ちにしてくれている市民は多い。2016年に八日市図書館で開催した「そこら展」（「そこら」で取り上げた人やモノを紹介するための企画事業）には、多くの市民が来場し、「そこら」に登場した人と直接話をしたり、作品に触れたりと市民が交流を深める機会となった。

図書館は様々な年代の人が立ち寄れる場所だ。「そこら」づくりで培った経験と人脈を活かした地域密着の取り組みを図書館が進めることで、市民に東近江のことをより深く知ってもらう機会となっている。地域の魅力に気づいた市民は東近江の魅力をPRする人になってくれるのではないかと考えている。これも図書館が地域の振興に寄与できる一つの成果ではないだろうか。

「そこら」5号では、「高校生と考える、このまちの未来」という企画でワークショップを行った様子や、地域の大学生が観光物産につけるロゴマークを作成する過程を記事している。また6号では、市内の高校生ライターがまちを取材し、高校生の目線でまちの魅力を紹介している。若い世代が今後、地域の魅力を伝える人材になってくれることを楽しみにしている。

「そこら展」では『そこら』を仲立ちに多くの交流がみられた

❾

伊那市立高遠町図書館

地域の情報と人のつながりを再構築する

伊那市地域おこし協力隊　諸田和幸

伊那市立高遠町図書館は1986年にオープンした。2006の合併により伊那市立図書館は伊那・高遠町の2つの中央館と8つの分館で、地域情報拠点として運営している。

伊那市立図書館では「伊那谷の屋根のない博物館の屋根のある広場」をキャッチフレーズに、目の前に広がる自然の中に残された歴史資産や自然遺産を活用する活動を行っている。

この活動のベースには、高遠町図書館に所蔵されている高遠藩時代の古文書や絵図などの資料を自由に活用・表現する人々を増やしたい、さらには情報を発信することの重要性を実感する〝場〟を提供したい、との思いがある。

これらの資料や自然を活用したプロジェクトの中から、「高遠ぶらり」「高遠ブックフェスティバル」「高遠文芸賞」について紹介したい。

図書館所蔵の古書を活用した「高遠ぶらりプロジェクト」

このプロジェクトは、2011年に伊那市立図書館と市民団体が共同制作した、携帯端末用アプリケーション（以下：アプリ）「高遠ぶらり」の公開を目指したのが始まりだ。

このアプリは、古地図や観光地図などの上にGPSの現在地情報を表示させ、その上に表示されるランドマークピンをタップすると、史跡に関する記事や写真、観光情報が表示されるセルフガイドツールだ。

だが、このプロジェクトは、単にデジタルツールを制作することを目標にしていない。参加者が街歩きをしながら地域を〝知る〟ことに重点を置き活動している。

プロジェクトのオーナーは図書館だが、アプリの制作・改定に向けた街歩きワークショップや情報追加などの企画運営を担うのは、市民団体「高遠ぶらり制作委員」である。この委員会が、誰もが情報収集や編集に参加できる〝場〟を用意している。制作を通して情報リテラシー向上、地域課題の掘り下げ、二次利用できるプログラムを提供しているのだ。

現在、ワークショップの参加者は60

「高遠ぶらり」アプリの画面の一部

諸田和幸（もろた・かずゆき）
伊那市立高遠町図書館勤務時代に「高遠ぶらり」プロジェクト事務局や高遠ブックフェスティバル企画・運営など、図書館と地域をつなぐプロジェクトに参加する。2019年から、伊那市地域おこし協力隊として伊那にUターン。現在は伊那市の教育の魅力の発信をミッションとして活動中。また、引き続き地域プロジェクトの企画・運営などでも活動中。

0人ほどにのぼり、アプリは2018年末の段階で8万件、54カ国でダウンロードされている。

アプリのコンテンツは「高遠ぶらり」のほか、江戸時代に高遠藩下屋敷があった新宿御苑周辺を案内する「内藤新宿ぶらり」や伊那谷文化園の情報を収めた「伊那谷ぶらり」などが追加され、関係地域の情報を多面的に知ることができるアプリとプロジェクトに発展している。

地域住民と図書館が主催する「高遠ブックフェスティバル」

2008年に第一回が開催されて今年で11年目を迎える高遠ブックフェスティバル。当初は、地域外の人々が始めたものだが、2012年からは地域住民主体の実行委員会方式となり、高遠町図書館が企画や出店者の調整を、実行委員会と共に担当している。

9月の3連休に開催しているこのフェスティバルは、3日間で来場者数1500人規模と決して大きなものではないが、地域内外の出店者や来場者と地域とつなぐことで、商店などとの関係人口を醸成し通年で訪れる人を少しずつ増やしている。

また、このフェスティバルを通して古書店と図書館が繋がり、古書市場の情報や資料の紹介を受けたり、散失の恐れがある地域資料の保存へ向けた活動を広げることができている。厳しい予算の範囲内ではあるが、これまで見逃されていた古書などの補完につながる活動にもなっている。

フェスティバルは10年で「本の街　高遠」を象徴する催しなった

まちの再発見につながる「高遠文芸賞」

2018年に、高遠ブックフェスティバル10周年を記念して創設されたのが、高遠をテーマとした文学作品を募集する「高遠文芸賞」だ。それまでは本を買うことやワークショップに参加するといったインプットの多い企画であったが、そこに文芸賞というアウトプットプログラムを追加することにより、観光で訪れ方々に自分の感じた高遠を表現してもらう手段ができた。地域にとってありふれた風景が観光と繋がり、訪れた人々との関係を維持し、地域外への露出増を目指す取り組みでもある。第一回の文芸賞への応募は46作品。県外からの応募も多く見受けられた。

また、このプロジェクトは、文芸賞作品を含め、地域のオーラルヒストリーをアーカイブし、「まちのほん」を制作することもミッションのひとつに置いている。本自体は販売せず、地域を代表する製本会社との連携により製本ワークショップとして自分で製本してもらう。そうすることで、地域への興味を増やしてもらうことも狙いのひとつだ。

高遠町図書館の関わるプロジェクトは、本やデータをまとめ、〝情報〟とすることで、これまでの「情報と情報」「情報と人」「人と人」の繋がり方を再構築しようとする試みだ。こうした活動は図書館をハブとした人や団体、施設などの交流を促し、地域観光資源発掘にも寄与できるものと思っている。

街のいたるところに本棚がある

愛知県図書館と
地域図書館が連携した
観光魅力の発信と
旅への誘い

「二度目の旅は図書館から」

愛知芸術文化センター愛知県図書館は、名古屋市内の名古屋城城郭内南西の一角にある緑に囲まれた図書館である。2018年3月にリニューアルした開放感のあるエントランスフロア（愛称：Yottekoヨッテコ）では、様々な企画展示やイベントが年間を通して開催され、新たな情報発信と交流の場となっている。

同図書館では2017年度より、「二度目の旅は図書館から～図書館からはじめるちょっとディープなまちあるき～」という企画をスタートさせた。「〝旅行者にもう1回地域に来てもらう。その時はまず図書館から旅をはじめてもらおう〟という狙いを込めたものです」と語る同図書館サービス課長の新海弘之氏に話をお聞きした。

「二度目の旅は図書館から」の最初の企画イベントは、2018年2月に開催した「魅力対決！豊橋vs田原in県図書」。内容は民話の世界から紹介する東三河の楽しみ方（トークイベント）、豊橋市と田原市の図書館司書による両市紹介と旅への誘いを目的としたライブラリー・トーク、1階エントランスフロアでの関連パネル展示などで、大きな盛り上がりをみせたという。この企画は、もともと、「魅力対決！豊橋vs田原」と銘打ち2016年9月～2017年1月の期間に豊橋・田原両市の図書館で開催された、両市図書館員が市の魅力を紹介し合う連携パネル展をきっかけとしている。県図書館の企画は、東三河地域の観光振興に力を入れている県の方向性にも合致したものとして、この2つの図書館が地域の魅力発信に動いた取り組みをあらためて県として取り上げたものであった。

「魅力対決！豊橋vs田原」の企画展示（2018年2月）
写真提供：愛知県図書館

県内全市町村のパンフレットや地域情報誌が揃う
観光情報コーナー

この企画イベントは継続しており、2019年1～2月には、蒲郡市を対象に第2回「蒲郡―海辺のまちの戦国時代―」が開催された。さらに2019年8月には、県図書館の企画を受けて、地元・蒲郡市立図書館が「海辺のまちの戦国時代」と題した企画展やトークショーを開催した。県図書館と地域図書館がテーマ・企画内容を共有し連携する取り組みは全国的にも珍しい。

企画イベントとともに県図書館で注目されるのが、1階の観光情報コーナーの充実である。2018年3月より、東三河地域各市町村のパンフレットを集めたコーナーを設置してきたが、県内全域に理解が広がり、現在は全市町村の最新のパンフレットや地域情報誌（フリーペーパーを含む）、イベントチラシなどが揃う。

県立図書館と市町村立図書館がそれぞれの役割をふまえながら連携する双方向の取り組みは、今後、地域が観光魅力の発信や観光需要の掘り起こしを図る上で、新たな可能性を秘めているように思われる。

（文：大隅一志）

大好物は郷土資料

眞鍋じゅんこ

「博物館にママが住む～♪」と、幼い頃の娘は妙な自作の歌をよく口ずさんだ。

取材旅行先で私だけ地元の郷土博物館や図書館に籠ってしまうからだ。その間、写真家の夫は娘を連れて風景写真を撮りに行ったものだ。

インターネット情報が飛び交う現代でも、地元資料の量と奥深さには絶対かなわない。特に図書館の郷土資料コーナーは宝の山だ。分厚い市町村史に郷土博物館や教育委員会発行の図録や資料集。小中学生向けの副読本「私たちの郷土」もわかりやすい。さらに足で情報を集めたタウン誌やミニコミ誌、商店街や町会、企業の周年記念誌や「草加せんべいの歴史」といった業界記念誌など、その土地の図書館でしかお目にかかれない冊子の数々も大好物だ。地元住人による自費出版の「わが人生」的な本もあなどれない。

それから観光パンフレット数十年分も土地の変遷がわかりそうだ。ことに市町村合併した自治体では合併以前の資料も残せればよいのに、と思う。

こうした貴重本（私にとっては）の数々を机に積み上げ、コピーしまくる。もう至福のひとときだ。外で待ちわびる家族のことも忘れて。

＊　＊　＊

もうひとつ、私が好きなのは地図だ。江戸切絵図に村地図、明治時代から現代までの比較図、歴代のゼンリン住宅地図。古い「町内会地図」や「商店街地図」を発見した日には狂喜乱舞だ。

戦火を免れた江東区深川図書館の郷土資料室では、貴重な地図の数々を閲覧できる。ここで戦後の築地市場内の店舗が細かく記された地図を見つけて、コピーを該当する知り合いの店に進呈したことがある。すると数年後、別な店で「これすごいですよ」と同じ地図が出て来た。よく見ると私のメモ書きまでコピー、苦笑した。どうやら市場内で回覧されているらしい。古い地図は当人たちにも大切な思い出なのだ。

写真：鴇田康則

現代だけじゃなく百年後の人のために

「人の生活を記録する」テーマを、私が強く意識し始めたきっかけは、30数年前に小笠原母島の民宿で読んだ1冊の薄い自費出版本だった。確か学校教師が団体で東京諸島を巡った紀行文で、定期船から上陸する島々での驚きや感想がさらっと記されている。中でも息を飲んだのが硫黄島だった。戦前の集落の様子が描写されているのだ。

今では一般人が上陸することすら出来ない、失われた風景がそこにあった。

別に学術論文でなくても、ただ見た事実を記せば後世の人に役立つかもしれない。これが私たちの仕事の原点だ。

＊　＊　＊

さらに日本交通公社旅の図書館副館長の大隅一志さんとの何気ない会話のひと言に、背中を押された。

「巷にあふれる情報も、ウェブでは数年先に見ることも出来ない可能性があります。でも紙媒体ならいつまでも残せます」。

出版不況といわれても可能な限り印刷物への執筆を続けようと心に誓った。

だから図書館も、未来人のために「昔」と「今」を出来る限り保存していただければ、と願っている。いっそ市民と一緒に「地元地図」を作ってみてはいかがだろう。図書館だけに資料なら山ほどあるわけだし。

全国津々浦々、興味深い郷土資料を見つけてはワクワクさせてほしい！

眞鍋じゅんこ（まなべ・じゅんこ）ノンフィクションライター。写真家の夫鴇田康則と共に、国内外の「人の生活を記録」して30年来旅を続け、雑誌や書籍、スライドトークや講演などで発表。NHK文化センター等でまち歩きの講師も務める。著書に「ニッポンの村へゆこう」（筑摩書房）、「うまい江戸前漁師町」「中古民家主義」（共に交通新聞社など）。現在月刊誌「散歩の達人」（交通新聞社）にて、「1964年→2020年東京オリンピックを歩く」連載中。

3 対談

観光と図書館

連携と活用の可能性をあらためて考える

構成・進行○大隅一志
吉澤清良
文○井上理江
写真○村岡栄治

指定者管理制度の導入が日本の図書館の転換期に

事務局　今回は、図書館と観光による連携の可能性について、さまざまな角度から図書館に造詣の深いお二人にお話を伺っていきたいと思います。

最初に今の図書館のあり方についてお聞きします。社会の変化に応じて図書館の役割や求められる機能は時代とともに変化してきたと思いますが、これまでの歴史から振り返って、近年の日本の図書館をどう見ておられますか。

猪谷　『未来をつくる図書館』という書籍が刊行され、指定管理者制度が導入された2003年に図書館は一つの転換期を迎えたと思います。『未来をつくる図書館』は、最近ドキュメンタリー映画が公開されて話題となっているニューヨーク公共図書館を紹介していますが、この頃から日本でも課題解決型やビジネス支援型の図書館が出てきました。

『未来をつくる図書館』
（菅谷明子著、岩波書店、2003年）

次にインパクトがあったのが、2013年にリニューアルオープンした武雄市図書館の登場です。TSUTAYAを運営するカルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）が初めて図書館の指定管理者となり、おしゃれな内装やスターバックスコーヒーがテナントで入るなど、大変話題になりました。市の人口が5万人規模なのに対して、初年度の来館者数が92万人というのは非常に異例で、視察も含めて市外からの来館者が非常に多かったと聞いています。

武雄市では宣伝効果の試算を20億円と発表しましたが、図書館で経済効果が算出されたというのも初めて聞きました。図書館としては評価が分かれるところもありますが、各自治体から集客施設として注目されたことは大きかったと思います。

嶋田　賛否さまざまな反応があった訳ですが、武雄市図書館から学んだのは民間のデザイン力や企画力を活用し、

人々が行きたい、居たいと思う場所を作ったことですね。図書館による情報提供をどう考えるかについても、大きなきっかけを作ってくれたと思います。

猪谷　平成27年に公表された文部科学省調査によると、公共施設で一番使われているのが図書館だそうです。美術館や博物館に比べ、図書館は来る人を選ばないですよね。学校や会社、家庭以外の〝サードプレイス〟としての役割が求められているのかなと。誰でも無料で利用できることから、観光客との接点としても、非常にいい場所なのではと思います。

誘客施設やアートイベントとの融合で広がる可能性

事務局　しかし、実際には観光客と図書館の接点はまだまだ少ないのが現状ですよね。可能性として考えられることや、ご存知の先行事例があれば教えてください。

嶋田　一つの役割として、旅行先での休息場所ということがあるのでは。お金をかけずに休憩でき、観光情報も集められますから。

猪谷　旅先で情報を整理したい時、私はブックカフェを探すことが多いのですが、図書館もいいですよね。先日名古屋に旅行した時、愛知県内の観光情報を求めて本屋を訪ねたら、京都のガイドブックしかなくて（笑）。図書館に行けばよかったと後から思いました。

　居心地が良かったり歴史的な建物であったり、何らかの付加価値があれば、観光客も旅先で図書館を訪れるのでは。例えば東京都千代田区の千代田図書館はコンシェルジュがいて、神保町の美味しいカレー屋など街の情報を教えてくれるので、観光客にも役立つと思います。

嶋田　そういう観点では、図書館も観光客に便利な場所にサテライトを設けるなど、立地を考える必要がありますね。

猪谷　国内外から観光客が押し寄せる原宿には、竹下通りの裏に渋谷区立中央図書館があり、抜群の立地です。そういう地の利をもっと活用してもいいのでは。

　通常、図書館の利用カードはその自治体及び近隣自治体在住者か通勤・通学者しか作れないことが多いのですが、沖縄の恩納村文化情報センターの図書

嶋田 学 × 猪谷千香

奈良大学 文学部 文化財学科 教授

ジャーナリスト／作家

奈良大学卒。1987年大阪府豊中市立図書館、1998年滋賀県旧永源寺町図書館準備室、2005年から東近江市立図書館での勤務の傍ら2008年同志社大学大学院総合政策科学研究科を修了（政策科学修士）。2009年同大学政策学部嘱託講師の兼業などを経て、2011年瀬戸内市の新図書館開設準備室長。2016年から瀬戸内市民図書館館長。2019年から奈良大学文学部文化財学科教授（司書課程担当）。著書に『図書館・まち育て・デモクラシー―瀬戸内市民図書館で考えたこと―』（青弓社、2019年）、『図書館サービス概論』（共著、ミネルヴァ書房、2018年）、『「図書館のめざすもの」を語る』（共著、日本図書館協会、2016年）など。

明治大学大学院博士前期課程考古学専修修了。産経新聞文化部記者、ニコニコ動画記者、ハフポスト日本版記者などを経て、現在は弁護士ドットコムニュース記者。全国の公共図書館や地方自治について取材をしており、著書に『つながる図書館～コミュニティの核をめざす試み』（筑摩書房、2014年）、岩手県紫波町の公民連携によるまちづくりを取材した『町の未来をこの手でつくる～紫波町オガールプロジェクト』（幻冬舎、2016年）がある。ほか『日々、きものに割烹着』（筑摩書房、2010年）、『その情報はどこから？～ネット時代の情報選別力』（筑摩書房、2019年）など。

館では日本全国、どこに住んでいても利用カードが作れます。

例えば雨が降って観光ができない時、東京から来ている子どもが図書館で本を借りて夏休みの宿題をして、東京から本が郵送返却されることもあるそうです。また、周囲のリゾートホテルのライブラリーの本選びに司書がアドバイスするなど、面白い取り組みを行っています。このように「滞在者のための図書館」という視点も大事なのかなと。

事務局　群馬県の太田市美術館・図書館のように、近年は図書館と他の文化施設を複合する動きも各地で見られます。

嶋田　近年は複合施設ではなく融合施設という考え方で整備されるケースが出てきており、福島県の須賀川市中央図書館は、ゴジラやウルトラマンを生んだ円谷英二ミュージアムと融合していますね。

猪谷　1階にはカフェなどの店舗のほか、バルタン星人などの怪獣が広場にいて、それを目当てに来る特撮ファンも多いようです。図書館は2階から4階をメインに展開、5階にミュージアムがあるのですが、それぞれが別個に存在するのではなく、互いの気配が感じられる構造で、まさに融合施設だと思います。

事務局　図書館と他の誘客施設などを組み合わせることによって、相乗効果が期待できるかもしれませんね。

猪谷　2000年からスタートした新潟県の「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」をはじめ、今、日本の各地域ではアートイベントが盛んで、公立美術館が会場となる例が多く見られます。図書館が単独でこうした取り組みを行うのは難しいですが、歴史や文化のツーリズムの中で何らかの役割を担うというポテンシャルも大きいと思います。

事務局　観光行政や観光協会はストックが苦手ですが、発信力を持っており、図書館には情報のストックがある。協力して互いの得意分野を活かすことができれば、可能性は広がりそうです。

猪谷　2005年に東京の谷根千地域で始まった「不忍ブックストリート」という取り組みでは、地域の中でも魅力的な書店や古書店、書店巡りの合間に休憩できるカフェなどを載せたマップを作っています。

あわせて彼らが始めたのが「一箱古本市」という、本好きの人たちが段ボール一箱分の本を持ち寄って売るというフリーマーケットです。そこから本好きのコミュニティが広がり、全国80ケ所以上の地域で行われていると聞きました。中には図書館で開催しているところもあるそうです。

鎌倉には「ブックカーニバルinカマクラ」というイベントがあり、鎌倉市図書館も参加しています。図書館は誰でも来られる施設ですが、図書館に来ない人とは接点がなかなか持てないというジレンマがあります。でも地域のコミュニティにこうして図書館側が出ていくことで、新しい人とつながることができますし、今お話ししたよう

恩納村文化情報センター

千代田図書館

なイベントは地域の外からもたくさん人が来るので、いい循環が生まれるのではと思います。

注目されるまち歩きと図書館の親和性

嶋田　私が館長を務めていた瀬戸内市民図書館には「もみわフレンズ」という友の会があり、会員が100名ほどいます。この会員と図書館の市民協働事業として現在取り組んでいるのが、地域のお宝を探して集めるコンテストです。

集めたお宝は本にまとめたり、ネットアーカイブのコンテンツとして残す予定ですが、たくさん集まっているのが石灯籠の写真です。そのマップを作ったらどうかという話になり、さらにその石灯籠がいつできたか、町史を見て学ぶという取り組みも始まりました。こうした取り組みにまち歩きを絡めるなどすれば、外から訪れた観光客も巻き込めるのではと思いました。

猪谷　長野県の伊那市立高遠町図書館は「高遠ぶらり」というアプリを作っていますが、これは博物館にあった古

瀬戸内市民図書館（撮影：中川正子）

地図をデジタル化し、GPSを使ってその古地図上で、自分は今どこにいるのかがわかるというもので、スマホなどの端末で使用します。

このアプリによって、ほぼ死蔵していた博物館の古地図も活用され、まち歩きのきっかけにもなっています。資料と人をつなぐためのこういう仕掛けを、図書館がもっとつくっていってもよいのではと思いました。

事務局　まち歩きとは今の観光のトレンドの一つであり、地域情報のストックがある図書館とは確かにすごく親和性が高いと思います。

嶋田　瀬戸内市民図書館では「ウィキペディアタウン」という取り組みを行ってきました。図書館の資料を使って住民が勉強し、例えば瀬戸内市立美術館など市内のある場所のウィキペディアのページに加筆するという取り組みです。

ここから発展して、図書館を拠点として「ブラタモリ」のような探索型のまち歩きを観光客と町の人が一緒に行い、集めた情報を書き込むというのも考えられるかなと。観光客にとっては「このページは自分が調べて書いた」という旅の思い出にもなりますよね。

猪谷　最近は観光ガイドブックもデジタル化が進んでいます。また、SNSにもガイドブックよりも確度の高い口コミ情報が寄せられていますので、そうしたデジタル情報を図書館も集めていかないといけないのではとも感じます。

嶋田　おっしゃる通りです。紙媒体のガイドブックはバリエーションが少なくなっていますし、図書館でも以前より貸し出しの数が減っています。その一方、観光のウェブ情報は増えていますが、検索すると同じような情報が検索の上位にきて、なかなか地元ならではの情報に辿り着けません。現地の観光案内所でパンフレットをもらって「こんなところがあったのか」と気づいても、予定が詰まっていて行けなかったといったケースもあります。

そういう意味では、旅行先のデジタル観光情報を出発前にスムーズに見つけられるよう、公共図書館がいわゆる「パスファインダー」の役割を果たすことも一つの仕事になるのかなと。例えば、それぞれの図書館が地域の観光情報のリンク集をホームページに掲載し、全国に発信するということも考えられると思います。

図書館と観光を結ぶには～地域情報の発信拠点としての役割

事務局　こうしてお話を伺っていると、図書館と観光には数多くのマッチングポイントがありますが、両者を結びつけるにはどうしたらいいでしょうか。図書館、観光行政、観光客それぞれの立場から見て、改めてご意見をいただけますか。

嶋田　観光客に対して、図書館が地域情報の発信拠点になるという発想は今までなかったですよね。でも、観光地にある図書館ならそういう取り組みはできると思います。

例えば塩尻市立図書館では書架の下

の方に「塩尻トリビア」という形で、地域のミニ知識を館内のあちこちにちりばめています。図書館なら一般的な観光情報だけでなく、その土地の歴史や文化、地理的な情報も幅広く提供できると思います。

郷土史家は研究のために、遠くの図書館まで資料を求めてわざわざ行くことがあるわけで、資源がその図書館にしかないという視点で見ると、図書館に行くこと自体が、観光の目的にもなり得るのでは。

猪谷　観光の情報って何かと考えた時、やはりコアとなるのは地域資料という気がします。山梨県甲州市の勝沼図書館は開館当時から地域の名産品であるブドウとワインに関する資料を集めてきました。海外雑誌や学会誌はもちろん、ここでしか読めないような地元ワイナリーのパンフレットや新聞雑誌の切り抜きまで収集しています。

それは地元住民向けでありつつ、観光客にとってもワイナリー巡りなどに役立ちます。実際、観光客が地元のワイナリーを訪ねると「自分たちの情報は全部図書館にある」と言われることもあるそうです。地域の情報収集を地道に重ねていれば、観光客へのアウトプットも自然とできるのではという気がします。

事務局　各地の産業や文化などの情報が集約されれば、図書館は地域らしさが可視化された場所となり、観光資源にもなり得ると言えますね。

嶋田　最近、よく関係人口という言葉を聞きますが、そうした情報や資料が結束点になって、地域の人と外の人をつなげるきっかけになると思います。図書館が人と人との関係性をつくる場になるということですよね。

そうなると、図書館の情報をいかに可視化するかが課題となってきます。

そこで重要になるのが図書館員としての矜持というか、愛している地域に対して何ができるかというライブラリアンシップだと思います。集めた情報を図書館としてどうアウトプットしていくかには、司書としての力量や行動力が問われると思います。

事務局　当初、対談テーマとして図書館を観光にどう活かすかという話を考えていましたが、地域で重要な活動の中に図書館をどう位置付けるかと捉えた時に、観光がその一つの役割になるのかなと。地域文化の一部に図書館が入っているというのは一つの自然な方向かもしれません。

猪谷　私は大学時代に考古学を専攻していましたが、恩師から「旅に行ったらまずその土地の博物館に行け。その土地のエッセンスが凝縮されているから」と教えられました。それが図書館であってもいいと、今日お話ししていて思いました。観光活動の一つとして、旅先の図書館で情報を得ることが当たり前になるのも、不可能ではないのではないでしょうか。

観光と図書館が結びつくための構造的な課題

事務局　とはいえ、観光と図書館が結びつくには、地方行政における構造的な課題もいろいろあると思います。具体的にはどういうことが考えられますか。

嶋田　自分の反省も込めて、「地域外から来る方への情報発信も自分の仕事」という思いが図書館側になく、そうした司書教育も行えていないのが現状です。各自治体の商工観光課も、図書館を自分たちのパートナーと考えているところは少ないと思います。

私がいた瀬戸内市は図書館が新しくつくられることをきっかけに、図書館側からかなり積極的にいろんな部署に働きかけたので、色々なことができるようになってきた。図書館側が変われば、どこでも同じことはできると思います。

猪谷　嶋田さんが瀬戸内市民図書館の初代館長に就任されるにあたり、最初に政策の担当課に配属されたとお聞きしましたが、図書館づくりにかなり影響したのでは。

嶋田　確かにこの経験は大きかったですね。市が図書館プロジェクトを立ち上げ、館長を全国公募して私が就任したのですが、市長の考えで1年目に総合政策部の政策調整課という企画部門に配属されました。図書館担当参事ということで課長級でした。この部署はいろいろな部署とやりとりしていて、財政課や総務課などと近いところで図書館について話ができたのは大きかったですね。

猪谷　自治体の組織の中で収入に直結する観光政策が本流とすれば、図書館はどちらかというと傍流です。基本的に教育委員会部局が管轄していますが、そのメインは学校教育なので、図書館はさらにその脇に位置する形で、なかなか行政の中枢で話題になることが少なかったと思います。中枢の方たちが図書館に目を向けたのは、おそらく冒頭でお話しした武雄市図書館のインパクトですよね。

今年、第9次地方分権一括法が施行され、教育委員会が管轄する図書館などの社会教育施設を首長部局に移すことが容易になりました。それによって今後はまちづくりなどで図書館が役割を担うことが増えるのかなと思います。

嶋田　その件については、昨年から文部科学省中央教育審議会の生涯学習分科会の中で議論されてきました。博物館や美術館、図書館などの社会教育施設の機能が、地域の活性化や賑わい創出など、教育文化の枠に収まらないまちづくりに役立つので、所管の領域を広くした方がいいだろうというのが議論の発端です。

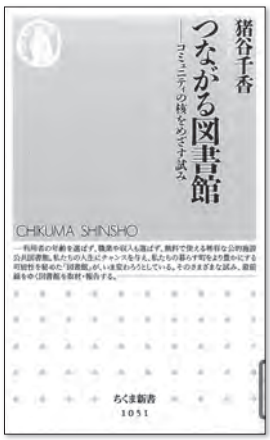
ただし、生涯学習分科会では政治的な中立性の担保、事業の継続性が懸念事項として挙げられていました。法律改正で管理を移すなど大きな動きがある場合は、首長部局は教育委員会の意見を聞かなければいけないと言う条文がありますが、首長は選挙で選ばれるので、人が変われば方針が大きく変わる可能性があります。一方、教育委員会は合議制で、議論、調整の仕組みが担保されているので、社会教育施設を手放すのは慎重であるべきだとも思います。

事務局　首長部局に移した方が、より横断的に図書館の可能性を引き出せるのでしょうか。

嶋田　瀬戸内市民図書館での経験から、教育委員会部局でも十分にまちづくりに絡む図書館経営はできていたと言う自負があります。首長部局に移した自治体でも、例えば島根県出雲市のようにまた元の教育委員会の所管に戻した事例もあります。ただ、首長部局にあれば、企画や財政部門とも頻繁に意見交換ができるということはあり、そのコミュニケーションの距離感は一つのポテンシャルですね。

ある自治体では、教育委員会と首長部局をつなぐ課が欲しいという議論がありました。人口が4万人程度の自治体だったので、文化課のようなものがなかったんですね。商工観光課で文化財を活かしたプログラムを企画するのは難しいので、まちづくりに関心があり、文化財を単に保護するだけではなく活かす仕事がしたいという学芸員を、教育委員会から商工観光課へ異動させ

『図書館・まち育て・デモクラシー』
嶋田 学 著、青弓社、2019年9月、四六判288頁、2600円＋税



『つながる図書館』
猪谷千香 著、筑摩書房、2014年1月、新書判238頁、780円＋税

『町の未来をこの手でつくる』
猪谷千香 著、幻冬舎、2016年9月、四六判222頁、1400円＋税

て仕事を進める事例がありました。

猪谷　自治体の規模にもよりますが、横断的な部署を作ることは大事だと思います。私が取材していた岩手県紫波町はそれまで図書館がない自治体でしたが、図書館を中核施設とした駅前町有地の開発プロジェクトを民間と一緒に公民連携で進めました。

大規模なプロジェクトで町の中でも担当課がいくつもまたがるため、それらを横串で刺す「公民連携室」というセクションを作り、住宅開発については事業のメインになる人材を配置したり、図書館を作る際にはこの公民連携室で司書を雇ったりしながら進めました。公民連携室に色々な部署の担当者を巻き込んでいったことで、一体感を持ってプロジェクトが進んだという事例があります。

嶋田　城崎温泉のある兵庫県豊岡市が今、面白い動きをしています。劇作家の平田オリザ氏が市の芸術文化参与を務めていますが、平田氏を学長として、市内に県立国際観光芸術専門職大学（仮称）が2021年に開学予定です。観光と芸術に特化した人材を育てることが目的です。

もともと豊岡市では舞台芸術のアーティスト・イン・レジデンス施設である「城崎国際アートセンター」を開設して、世界中からアーティストを集めたり、舞台稽古を市民に見せるなど、芸術に関する取り組みに熱心です。

その大きな流れとして首長部局に図書館が置かれていることが挙げられ、図書館を情報拠点にしたいという市長の考えが表れていると思います。今日の観光と図書館という対談テーマともかなり重なる部分があるので、今後の動きに注目したいと思います。

地域の魅力を「気づく、見つける、創る」ことができる場所に

事務局　あらためて今回のテーマについて、最後に一言ずついただけますか。

猪谷　今日はあまり財政の話が出なかったのですが、多くの自治体の財政は逼迫し、東京の一極集中や少子高齢化でそれぞれ悩みを抱えています。地域の人口を爆発的に増やす手法はなかなか見つけられないと思いますが、嶋田先生がおっしゃるように関係人口を増やすことはできると思います。

そういう観点から図書館はポテンシャルがあり、大きな役割を担えるのではと思います。その土地の魅力を自分たちで引き出しつつ、発信する拠点になり得ると思いますし、そうした役割を期待したいと思います。

嶋田　観光というのは、自分たちのところにしかないものに光をあてる行為であり、住民たち自身が自分の町のいいところに気づく、見つける、創る時のきっかけとなるのが観光という文化なのではないかと思います。

平田オリザ氏の言葉を借りると、地域には「文化の自己決定能力」が必要だと思います。そういう地域を作ることを支えるのが図書館の仕事であるなら、住民の人たちが「気づく、見つける、創る」ことができる場所にしていかないといけません。観光というのは自分たちの暮らしの外側に存在するものではなく、自分たちの日常をも輝かせているものであると捉え直すことが図書館ならできるのかなと、今日の対談で気づけた思いがしました。

事務局　冒頭で、公共施設の中で図書館は一番使われているというお話がありました。図書分類の日本十進分類法（NDC）でも図書館学の本は0番台に属しています。誰にでも使えて何色にも染まっていないフラットな存在であるからこそ、図書館が観光と結びつく可能性も大きいと、改めて示唆をいただいた気がします。本日は貴重なお話をありがとうございました。

半世紀以上も前に提唱されていた〝観光と図書館〟

旅行者、観光客のための図書館の必要性について、実は半世紀以上も前に二人の先達によって提唱されていたことをご存じだろうか。

一つは和田萬吉氏（東京帝国大学図書館長）の「旅客の為めに図書館」、もう一つは南益行氏の「観光図書館論」である。いずれも、観光における観光文化活動の重要性を認識したうえで、図書館の果たすべき役割や可能性として〝観光図書館〟を提唱しており内容に共通点も多い。これらが、前者は100年以上も前に、また後者でも60年以上前に論じられていたことは驚きに値する。これらのなかで着想・提唱されていることのほとんどは今もって実現をみていないが、現代社会における観光の役割の重要性を鑑みたとき、今後の図書館のあり方を観光という側面から考えるうえで実に示唆に富んでいる。

以下、それぞれについて一部要約して紹介する。

和田萬吉
「旅客の為めに図書館」

ジャパン・ツーリスト・ビューロー.『ツーリスト』. 第六年第五号, 1918年9月, P.17-22

○遊覧地、鉄道、汽船、ホテル等で小規模な図書館を設けることは緊切であり、特に避暑地など旅行者が長期滞在する場所では、旅行者のみならずその地域の繁栄を図る一策となる。
○汽車、汽船は単に旅行者を送迎し、旅館は旅行者を宿泊させるだけではなく、その土地の有志と協力して小図書館の設置に早く着手すべきである。
○図書館の管理・運営にあたっては片手間ではなく専任で従事する人を付けるべきである。
○蔵書の数としてはそれほど多くなくても良いが、きちんと選書したものを置くこと。備えるべき図書としては、その地域の歴史、地理、工芸、産業などの郷土資料が第一であり、次いで高尚な文学、産業など美術書類などである。
○閲覧は無料にすべきである。貸出をする場合は一日は無料にして、それ以上の期間になる際は一定の料金を徴収することもよい。

17

旅客の爲めに圖書館

東京帝國大學圖書館長　和田萬吉

旅行と讀書

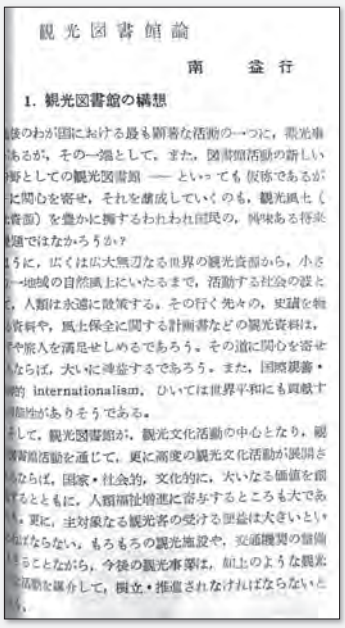
一　遊覧地、鐵道、汽船、ホテル等に於て旅客の爲に小規模の圖書館を設けて自由に圖書を閲覽せしむることは甚だ緊切にして、殊に避暑地、避寒地の如く多少長時期に亙りて旅人の足を留めしむる處に在りては、旅館と同時に修養の資料として通常の圖書を備ふる小圖書館を設くは

※和田萬吉：東京帝国大学図書館長（当時）

南 益行
「観光図書館論」

日本図書館研究会編.『図書館界』. 第6巻第3号,1954年1月, P.109-110

○広大無辺な世界の観光資源から一地域の自然風土にいたるまで、人類は永遠に散策する。その行く先々の史蹟を物語る資料や風土保全に関する計画書などの観光資料は、必ず旅人を満足させる。
○観光図書館が中心となり高度な観光文化活動が展開されるならば、国家・社会的、文化的に大きな価値を創造し、主対象となる観光客の受ける便益も大きい。
○従来の観光事業、観光活動により文化的な面を採用し、観光図書館のframeworkを構築する。
○目的、資料構成、図書館奉仕の全活動において、特殊な専門図書館としての性格を持つ。
○資料の種類：観光地図、観光写真、ポスター、絵葉書、郷土資（史・志）料、観光リーフレットなど
○内外の観光客に対する誘致宣伝をし、図書館資料を提供する観光文化活動推進のための種々の調査・統計・研究を行い発表する。
○有能な館員または司書が参画する。
○①国又は地方公共団体、②有志者や私立観光団体により出資・維持・経営する方式がある。


観光図書館論

南　益行

1. 観光図書館の構想

視座

観光と図書館

～地域の観光に図書館はどう寄与できるか～

公益財団法人日本交通公社 観光文化情報センター長／旅の図書館 館長 吉澤清良
同 副館長 大隅一志

はじめに

今回の特集「観光と図書館～地域の観光に図書館はどう寄与できるか」は、当財団で「旅の図書館」の運営に係わる職員の多くが、日頃から関心を持っていた研究テーマである。当館は、特集1（図書館を取り巻く動向と観光振興）で述べた通り、「観光研究のプラットフォームでありたい」と、図書の閲覧の他、さまざまな取り組みを行っている。これらは主に旅行者の発地側での取り組みとなるが、地域、特に観光地においても、図書館は〝上質で心豊かな旅づくり〟などの一助になるのではないかとの期待を持っている。

「観光と図書館の連携・融合」については、コラム（38頁）でも示した通り、半世紀以上も前に、和田萬吉氏、南益行氏によって〝観光図書館〟として提唱されているものの、その多くは未だに実現していない。

その後も関連する研究は、観光学、図書館学の双方においてほとんど見ることがなく、2010年に、松本秀人氏が「観光と図書館の融合」を研究テーマとする論文等（※1）を発表し、注目を集めることになる。この中で、同氏は、観光、図書館それぞれにさまざまな分析を行ったうえで、図書館を観光者と地域とを結ぶコミュニケーションの媒介役として捉えた「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」を提示している。これらの研究を、私どもも大いに参考にさせていただいている。

松本氏の研究発表以降、特集1で述べたように各種法制度の導入も後押しし、「紫波町図書館」（2012年）、「武雄市図書館」（2013年）など、観光と図書館が連携した特徴的な事例が、各地で見られるようになってきた。特に対談（観光と図書館　連携と活用の可能性をあらためて考える）にもあるように、「武雄市図書館」が民間のデザイン力や企画力を活用し、人々が行きたい・居たいと思う場所を作ったことは注目に値する。図書空間の持つ人を惹きつける魅力を再認識するとともに、図書館の情報発信のあり方についても考える、大きなきっかけとなった。

本稿では、各特集を振り返り、図書館と観光の連携・融合に向けた課題や、今後の取り組み推進に向けたポイントを考察していく。

【特集2】地域の取り組みを振り返る

特集2では、各図書館の事例をその特徴的な取り組み等により、便宜的に4つのタイプに分類している。表1は特集2で取り上げた事例の主な取り組み・エピソード等と事例より示唆されたポイント等を整理したものであるが、ここではまず各事例の特徴的な取り組みをあらためて振り返っておく。

Type A 観光対象・目的となる図書館

事例1…高山市図書館煥章館

同館は建物自体が、明治時代の煥章学校を模した特徴的な造りとなっている。館内には高山に縁の深い近代文学者の足跡等を紹介する近代文学館も併設されている。また、アニメ・実写映画化された「氷菓」にも登場することから聖地巡礼（※2）の対象地ともなっている。

事例2…八戸ブックセンター

同センターはスタイリッシュな館内に、一般書店ではあまり見かけることの少ない分野の書籍を重点的に取り揃え、本との「出会い」を大切にした提案・編集型の陳列がなされている。

Type B 観光客の滞在・時間消費の場となる図書館

事例3…恩納村文化情報センター

同センターの「郷土書コーナー」には沖縄の旅の本も集められている。また、村外・県外の方にも本の貸し出しを行っているほか、村内の大型リゾートホテルのミニライブラリーを蔵書の貸し出し、選書のアドバイスなどを通してサポートしている。

事例4…奈良県立図書情報館

同館はホテル日航奈良に、奈良の歴史や文化に関する書籍や写真集など20～30冊を選書し、各本に簡単なコメントをつけて貸し出している。

Type C 地域をつなぐ図書館

事例5…甲州市立勝沼図書館

同館では、地域の基幹産業である「ぶどう・ワイン」の資料収集・提供・保存に取り組み、地域とのつながり・広がりを企図した「ぶどうとワインの資料展」を開催している。また、地元ワイナリーとの連携により趣向を凝らしたワインを楽しむ催しなども開催している。

事例6…小布施町立図書館

同館では、「本とつながる、人とつながる」をコンセプトに、商店や個人宅で所蔵図書をその一角に並べ、訪れる町内外の人が自由に本を手に取り、店主（館長）とのふれ合いを楽しむ仕かけ、「まちじゅう図書館」に取り組んでいる。

事例7…千代田区立千代田図書館

同館の館内には、地域連携を意識した2カ所の展示コーナーが設置されている。また同館の大きな特徴でもある「コンシェルジュ」が企画した、古書店や建築物などを巡る「コンシェルジュと巡る神保町ツアー」を開催している。

Type D 地域魅力を発信する図書館

事例8…東近江市立八日市図書館

同館では、「よりよいまちづくりとひとづくりを進める図書館活動の推進」を実現するための手立てのひとつとして、図書館外の人々とともに地域情報誌「そこら」を発行している。

事例9…伊那市立高遠町図書館

同館では、図書館所蔵の古書を活用した「高遠ぶらりプロジェクト」のほか、地域住民と図書館が主催する「高遠ブックフェスティバル」、まちの再発見につながる「高遠文芸賞」などに取り組んでいる。

なお、表1をより丁寧に見てみると、それぞれの図書館が、この他にも意欲的に様々な取り組みを行っていることがわかる。今回取り上げた事例の中には、既に全国的に注目されている図書館も少なくないが、観光という側面から捉えると、新たな気づきやヒントが見えてくる。例えば、地域遺産（歴史的建築物）と知的遺産（図書館）は親和性が高いと思われる。

また、対談やコラム（29頁）でも、各図書館の取り組みの助言ともなる、ご意見が得られている。

・図書館が、歴史や文化のツーリズムで何らかの役割を担うというポテンシャルは大きい。

・図書館は誰でも来られる施設だが、地域のコミュニティに図書館が出ていくことで、新しい人とつながり、いい循環が生まれる。

・旅行先のデジタル情報を出発前にス

ムーズに見つけられるよう、図書館が「パスファインダー」の役割を果たすことも仕事になる。

・巷にあふれる情報もウェブでは数年先に見ることもできない可能性がある。でも紙媒体ならいつまでも残せる。

【特集2】事例からの示唆

表1で整理した各事例から示唆されたポイント等の「分類」をみると、「位置づけ等」では、「東近江市立八日市図書館」が、図書館はひとづくりを支える教育施設で、その基本的な要件を満たしていることの重要性を指摘している。観光と図書館の連携・融合を考えるうえでも忘れてはならない大切な視点である。

そのうえで、特に観光地に立地する図書館（高山市図書館煥章館、八戸ブックセンター、恩納村文化情報センター、甲州市立勝沼図書館、小布施町立図書館）では、観光客の利用も想定した取り組みも行われている。

しかし観光地に立地する図書館に限らず、少なからず観光を意識することは、地域の良さの再認識などにつながるのではないか。対談でも、観光は、住民が自分の町の良いところに「気づく、見つける、創る」きっかけとなる。「文化の自己決定能力」を持った地域づくりを支えることが図書館の仕事であるなら、住民の「気づく、見つける、創る」ことができる場所にしていかないと、とある。

各図書館の観光面での「役割・機能」をみると、「高山市図書館煥章館」「恩納村文化情報センター」「奈良県立図書情報館」「小布施町立図書館」では、特に「情報発信」が挙げられている。その中でも、「高山市図書館煥章館」「奈良県立図書情報館」では、地域文化等を住民が知ることの必要性を訴え、その上で図書館は情報発信の「要」「場」となると述べている。なお、これについては、巻頭言（うとぅいむち）の心を図書館から）でも同様の主旨が述べられている。

「甲州市立勝沼図書館」「伊那市立高遠町図書館」では、特に「地域資料等の収集・保存・活用」を挙げている。図書館は資料等が揃っているからこそ、多角的なつながりが持てる場所になれる、図書館をハブとした交流が可能になると言及している。

各地の文化や産業などの情報が集約されれば、図書館は地域らしさが可視化された場所となり、図書館自体が観光資源にもなり得るのではないかと、私どもは考えている。

その他、「八戸ブックセンター」では、特に「周辺施設とも連携した、本を取り巻く人の交流促進の取り組み」が行われている。また、「小布施町立図書館」「千代田区立千代田図書館」では、「地域連携」が強く意識されている。

「効果」をみると、「八戸ブックセンター」では、八戸市民のためのさまざまな取り組みが結果として八戸市の来訪者を増やすことにつながっている。「恩納村文化情報センター」でも、住民向けの郷土資料の収集等が観光客に向けたサービスの向上にもつながっているとのことだ。また同センターでは、来訪者の増加、周辺施設との相乗効果も得られている。

「小布施町立図書館」では、「まちじゅう図書館」などの取り組みによる新たな交流の創出が、「伊那市立高遠町図書館」では「高遠ブックフェスティバル」などによる関係人口の増加が、効果として挙げられている。

なお、関係人口に関連して対談では、図書館が人と人との関係性を作る場として集めた情報をアウトプットしていくには、図書館員としての矜持、地域に対して何ができるかという「ライブラリアンシップ」が問われると述べられている。なお、現状では、図書館が地域外への情報発信を仕事として意識することは稀で、自治体の観光課も図書館をパートナーであると考えるところは少ないとの指摘もされている。

観光と図書館の連携・融合、観光まちづくりに図書館を活かす

各地の事例からもわかるように、図書館は地域文化の根幹を支え、「資料」と「人」そして「地域」をつなぐ重要な役割を担っている。観光との高い親和性を活かし、図書館と観光がより効果的に連携・融合を図ることは、地域の観光振興に大きく寄与するものと思われる。そのためには、観光サイド、図書館の双方が、次のような視点を併せ持っておくことが必要である。

○図書館を観光客も含めて誰もが足を運べるフラットな場所とする～公共施設で最も住民に利用されている図書館への観光客の来訪は、観光活動の多様化のみならず、住民との交流につながる。

○図書館の集客効果を活かし相乗効果の高い観光振興を図る～魅力的な建物や蔵書、イベント、付帯機能（飲食等）による図書館の集客効果を活かし観光施設などと連携することで、相乗効果が期待できる。

○地域にしかない魅力に「気づく、見つける、創る」―情報発信の拠点となる～図書館は地域の知的遺産を「地域の魅力として可視化」していく要の存在。観光客という外の眼を加えることで、より魅力ある地域づくりにつなげることができる。

また、観光まちづくりに図書館を有効活用していくためには、まずは次の事項から検討していきたい。

○観光行政や地域関係者との連携～行政、図書館、民間団体、住民等が、観光と図書館が連携・融合していくことの意義や課題、方向性を共有しながら、観光に図書館を活かした施策を推進していく。

○観光客が図書館を利用やすい環境づくり～観光客が図書館を利用しやすい環境づくりが不可欠。そのための利用サービスや仕組みづくりに地域ぐるみで創意工夫していくことが望まれる。

○〝地域を想う〟ライブラリアンシップに溢れた人材の活用と育成～図書館員は、人と地域をつなぐコンシェルジュともいえる重要な存在。地域の貴重な知的遺産を次代に継承しながら、その魅力を伝える気持ちとスキルを持った人材に活躍いただく。またそうした人材を育てていく。

表❶ **特集2で取り上げた事例の主な取り組み・エピソード等／事例より示唆されたポイント等**

Type A

観光対象・目的となる図書館
（建物自体の魅力、特徴的な蔵書、博物館の併設等）

Type	図書館名	紹介された主な取り組み、エピソード等（（ ）内のアルファベットは、取り組みのTypeとの対応）	示唆されたポイント等	分類：位置づけ等	分類：立地特性	分類：役割・機能	分類：効果	分類：その他
Type A	【事例1】高山市図書館 焕章館	●（焕章館は）建物も擬洋風の風情ある景観を呈している（TypeA） ●近代文学館（瀧井孝作・江間修・福田夕咲・早船ちよの作品をはじめ飛騨の歴史・文化に関する書籍を数多く所蔵）（A） ●聖地巡礼（米澤穂信氏の高山を舞台にしたライトノベル小説「氷菓」のアニメ化、実写映画化）（A） ●（観光客を対象とした）高山祭のミニ講座を1階オープンスペースで開催（B）（D） ●バイオリン・ビオラ・チェロの春慶弦楽器による演奏会（B）（D） ●飛騨春慶（漆器）と一位一刀彫（彫刻）の作品とその関連書籍を展示（B）（D） ●（今後）焕章館と「飛騨高山まちの博物館」「飛騨高山まちの体験交流館」の連携した取り組み（C） ●館内の情報コーナー（観光エリアにある図書館としてのサービス向上）（D） ●オー・ラン県と同県内にある高山市の友好都市コルマール市の文化や風景等の同時展示（I） ●旅館・ホテル業従事者を対象とした英会話講座（I）	焕章館は観光地飛騨高山の観光エリアに位置 それぞれの地域が有する伝統文化や伝統工芸、また、各地域で新たに創造された文化を市民が共有し、さらには国内外から訪れる多くの人たちに情報発信する「要」の施設としての図書館の役割は極めて重要であり、情報発信施設としての機能を高めていくことが高山市の観光文化の振興にもつながっていくものと考えている。 こうした創意工夫を凝らした多彩な取り組みを継続していくことで観光文化の振興に寄与していくことができると考えている。 これらの事例や今後の取組みは図書館や他施設への来館者を対象としたものであり、観光文化を今後さらに振興していくためには、こうしたサービスの充実に加え、食文化など地域の生活文化もコンテンツに加えた形で、SNSの活用などICT技術を駆使した情報発信の充実も必要であると考えている。 高山市が伝統文化を基調とした観光地であることを踏まえれば、観光文化の振興への寄与も当館に求められる重要な役割りのひとつであり、高山市が持つ有形無形の伝統的な文化、さらには、地域の創造的な活動によって新たに生み出された文化芸術など高山市の観光資源の情報発信に、今後も創意工夫を凝らして取り組んでいきたい。	●観光地	●観光地	●発信 ●発信		市民理解の向上 取組継続

Type B 観光客の滞在・時間消費の場となる図書館

（郷土資料などを通した地域文化の探求、イベントへの参加機会の提供等）

【事例2】八戸ブックセンター

- 海外文学や人文・社会科学、自然科学、芸術などの分野の本を中心に扱い、また本との「出会い」を大切にするため、提案・編集型の陳列により「紙の本」との偶然の出会いを創出することを心がけている（A）
- 近隣の拠点施設（八戸ポータルミュージアム、八戸まちなか広場マチニワ）などとも連携して、作家などのゲストを招いてのトークイベントや、市民参加型の一箱古本市をメインとした「本のまち八戸ブックフェス」を実施（B）（C）
- （八戸関係者）1冊の本が出来るまでの過程を館内のギャラリーで展示し、実際にその本を当センターの企画として出版することを毎年恒例の企画としている（B）（D）

「本を読む人を増やす」「本を書く人を増やす」「本でまちを盛り上げる」の三つの基本方針に基づき、特徴ある本の陳列・販売のほか、さまざまな企画事業を通して、「本」そのものや、「読む」、「書く」事がもっと市民の身近になるように、また、「本」を取り巻く人の交流を促進することで、まちを元気に、盛り上げていくことを第一の目的として運営している。

さまざまな企画事業を通して、「本」にまつわる新しい公共サービスを提供する「本のまち八戸」の拠点施設

こうした本を介して人の交流を増やす試みは、もちろん八戸市民のための取り組みであるが、結果として出張者や観光客からも高い評価を得て、当市への来訪者を増やす一助となっている。

今後も、民間書店・図書館・市民団体など関係各所との話し合いを重ね、本に関わる人たちとともに、公設の書店としての八戸ブックセンターを通して「本のまち八戸」を推進し、市民が誇りに思え、市外からの来街者にもその意義が伝わる、文化の薫り高いまちづくりをしていきたいと考えている。

●		●	交流促進	
	●			
	観光地		まちづくり	市民の誇り醸成
			印象向上	
			客増	

【事例3】恩納村文化情報センター

- 「おんなの駅なかゆくい市場」が隣接する位置に、恩納村博物館（2001年開館）に併設する形で整備（A）
- 窓際の閲覧席から美しい沖縄の海や夕日が楽しめ、リゾート地ならではの図書館としての魅力（A）
- 恩納村・沖縄県の郷土資料を揃えた「郷土書コーナー」（B）
- 全国どこに住んでいても本を借りることができる（B）
- 村内の大型リゾートホテルとの連携では、ミニライブラリーの設置（B）（C）
- 本を借りると隣接する「おんなの駅」の商品が5％割引される「割引クーポン」（C）
- 観光協会から配置された2名の「旅の案内人」が村内及び北部観光地、観光施設の情報提供を行っている（D）

恩納村は、沖縄本島のほぼ中央の西海岸に位置する人口1万人の小村でありながら、大型のリゾートホテルを中心に、沖縄本島の宿泊施設（ホテル・旅館）収容力の約2割が集積する県内屈指の観光・リゾートの村である。

同センターは、「恩納村に関するあらゆる情報を収集し、村内外へ発信する」ことを目的とした、観光情報提供機能と図書館機能を備えた複合施設で、計画当初から観光客の利用を強く意識した施設づくりをしている。

郷土資料の収集など村民のために行うサービスが、結果として観光客に向けたサービスの向上にもつながっている。

恩納村文化情報センターの来館者数は、当初の目標を上回り、開館初年度の2015（平成27）年度の約6.8万人から、2018年度は約8.9万人へと着実に増加している。また、センターの開館による周辺施設への相乗効果も大きく、併設する博物館の入場者数は約2.5倍に、また「おんなの駅」の年間来客者数も100万人を大きく上回るまでに増加をみている。

	●			
●		●		
観光地		発信		
			サービス向上	
			客増、相乗効果	

【事例4】奈良県立図書情報館

- ホテル日航奈良に対する本の特別貸し出し（B）（C）
- ホテル日航奈良が、当館で開催されたフォーラムの宿泊プランをつくり、当館との連携イベントとして開催（B）（C）
- フォーラム会場では、観光情報の提供や参加者の奈良のお店など口コミ情報の交換ボードを設置（D）
- 全国の都道府県立図書館等と連携し、お互いの観光ポスターやパンフレットを交換し、その都道府県関係本と併せて展示する図書館交流展示を開催（D）

奈良県立図書情報館は、観光地奈良にあって、数多くの観光施設があるなかで、図書館が観光にどのように関わることできるかということは、開館以来の課題のひとつであった。

図書館が、様々な切り口で資料や情報を（また人を）再編集し、人々の潜在的な好奇心や関心を触発するために、どうアプローチするのか、観光もまたひとつの切り口であり端緒となると思われる。

このような図書館からの情報発信は、県外から（あるいは海外から）来県する人々に向けてだけではなく、地元の人々にもアプローチする必要があると思われる。地元の人々がその地域の重層的な歴史や知識を持っているわけではないので、地元の人々向けの地元の観光、地産地消の観光ともいうべき発想は、外への発信の基盤となるのではないか。自らを知り、地元への理解や共感の共有こそが、新たな観光資源や観光のあり方を見つけ出すことへと繋がるのではないかと思われる。そして、地元の資料・情報を蓄積している図書館こそが、まさしくその発想を支え、発信する場なのである。

	●			
	観光地			
●		●		
発信		発信		
	観光への対応が課題	情報再編集		市民の理解の向上

Type C

地域をつなぐ図書館

（本を活かしたまちづくり、まちじゅう図書館等）

【事例5】甲州市立勝沼図書館

●開館当初から、スタッフの熱意と「地域に根差した図書館であろう」とのコンセプトのもと、地域の基幹産業である「ぶどう・ワイン」の資料収集・提供・保存を、この地の図書館としての目標に掲げた(A)
●専門書も多く所蔵しているということで、県内外ワイナリー、ブドウ農家、そして多くのワインファンが歓喜する場所(A)(B)
●ぶどうとワインの資料展（地域資源「ぶどう・ワイン」を軸につながり、広がっていく人々、産業や時代のニーズ、歴史の中で先人が残した文化と次世代への継承などを知ってもらうことで、もう一度地域を見直す・誇りを持ってもらう）(B)(C)
●地元ワイナリー若手集団の話を聞き、試飲を行うイベント(B)(C)
●近年、ワインツーリズムとの連携事業も大きなものとなり、今では資料展用の観光マップに図書館を掲載(C)(D)
●来館され、資料の説明を聞くだけではなく書籍を借りていかれる参加者もいる。特に自館資料として作成している、市内全ワイナリーのファイルが大変喜ばれる(D)

開館当初から、スタッフの熱意と「地域に根差した図書館であろう」とのコンセプトのもと、地域の基幹産業である「ぶどう・ワイン」の資料収集・提供・保存を、この地の図書館としての目標に掲げた。

図書館のイメージは「書籍を借りることだろう。しかし本来、様々な資料が揃っている図書館だからこそ、多角的なつながりが持てる場所だと思っている。もちろん、飲食や音楽にも。勝沼図書館は地域産業に特化した資料収集を行っているため、観光とも結びつくことができる。以前、勝沼のワインの歴史をお客様に聞かれたワイナリーの方が話してくれた、「勝沼図書館に行けば全部わかるよ」。この言葉とともに、全てをツナグ、全国の葡萄・ワインファンに愛される、地元『勝沼』の根を支える、唯一無二の図書館でありたい。

●	●収集・提供等
●	●観光地
	●つながりの場

【事例6】小布施町立図書館

●2011年には町民主体の図書館づくりが評価され、ライブラリー・オブ・ザ・イヤー大賞を受賞、『日本の最も美しい図書館』（2015エクスナレッジ）など多くの出版物で紹介された(A)(C)
●観光協会の小布施ボランティアガイドによる町内ガイドコースにテラソが加わることがある(A)(C)
●蔵書では町内刊行物のほか、小布施の先人、小布施縁の葛飾北斎や中島千波氏等、町出身者の関連出版物コーナーを設けるなど地域に係る情報集積に努めている。また、先人のひとりである豪商高井鴻山が好んで描いた妖怪関連図書を多く選書するなど工夫を凝らしてきた(B)
●テラソは小布施駅から徒歩2分の位置にあるため、土産物を携えた観光客が立ち寄り、本を手に取る姿が見受けられる(B)
●2012年にまちじゅう図書館を開始した。「本とつながる、人とつながる」をコンセプトに、商店や個人宅で所蔵図書をその一角に並べ、訪れる町内外の人が自由に本を手に取り、店主（館長）とのふれ合いを楽しむ仕かけである(C)
●カウンターは通常業務のほかコンシェルジュとしての機能も有している。観光地図の配布と案内、美術館共通券や開催行事入場券等の販売など丁寧な対応を心がけている(D)
●HPでは江戸時代の小布施村中心図を「小布施ちずぶらり」に掲載し、観光客らが現地で対照して歩くプログラムを提供している(D)

建設時の基本構想では、テラソが「学びの場・子育ての場・交流の場・情報発信の場」となるようビジョンが示された。このうち、観光面については、来訪者と住民との交流支援及び集積した町内関連刊行物による町内情報発信を担うとした。

まちじゅう図書館は、本を介した館長と町内外の人とのつながりから新たな交流や空間を創出する効果が期待され、オープンガーデン同様に小布施観光の特色のひとつとなりつつある。

観光協会との連携と情報交換、まちじゅう図書館をつなぐセンターとしての役割の検討などが今後の課題となっている。

●	●観光地
	●発信
	●交流創出
	●連携調整

【事例7】千代田区立千代田図書館

●図書館の大きな特徴となっているのがコンシェルジュサービス。本探しの手伝いや館内の総合案内だけでなく、区内観光に関する質問にも幅広く対応している(D)
●図書館コンシェルジュと巡る神保町ツアー（古書店や建築物巡り、映画ゆかりの地巡り、雑誌「散歩の達人」とのコラボ企画など、ツアーのテーマはさまざまで、コンシェルジュたちが企画内容を考えている）(C)(D)
●館内には2カ所の展示コーナー（「地域連携コーナー」「展示ウォール」）があり、どちらも2～3ヶ月ごとに内容を変え、常時展示を行なっている(C)(D)

リニューアルする千代田図書館の指定管理者を募集するにあたり、区が強く求めていたのが地域との連携。

千代田区民は6万人なのに対し、区の昼間人口はその14倍に当たる約85万人。千代田図書館も在勤在学している区外在住の方の利用が多く、図書館を拠点として、そうした方にもっと千代田区を知っていただきたい。

	●地域連携
	区外者の理解向上

Type D 地域魅力を発信する図書館
（HPや館内での地域の観光魅力の発信等）

Type	図書館名	紹介された主な取り組み、エピソード等（（ ）内のアルファベットは、取り組みのTypeとの対応）	示唆されたポイント等	位置づけ等	立地特性	役割・機能	効果	その他
D	【事例8】東近江市立八日市図書館	●「よりよいまちづくりとひとづくりを進める図書館活動の推進」を実現するための手立てのひとつとして、私たちは6年前から図書館外の人々とともに地域情報誌「そこら」を発行している（C）（D） ●（そこらを）つくるにあたって、図書館に編集などのノウハウはある、でも印刷費は無い、広く情報を集め記事にしたい、等々の思いから、図書館以外の人や機関と連携することとした（C） ●（そこらを）市観光物産課はまちの魅力を市民や都会の人々に伝える場で配布している。広報課は市内の各高校に「そこら」を持参してPRし、新たな書き手＝高校生ライターを生んでいる。森と水政策課では2017年度に本市で開催された「ローカルサミット東近江」の様子を伝える場として「そこら」を活用した（C）（D） ●「そこら」を毎号心待ちにしてくれている市民は多い。2016年に八日市図書館で開催した「そこら展」（「そこら」で取り上げた人やモノを紹介するための企画事業）には、多くの市民が来場し、「そこら」に登場した人と直接話をしたり、作品に触れたりと市民が交流を深める機会となった（B）（C）	近年、図書館を人が集まる「にぎわい拠点」や「観光施設」として捉える動きがある。しかし、図書館はひとづくりを支える「教育施設」である。図書館として一番大切なことは、市民の要求に応えるだけの資料を整備できているか、利用者と資料を結ぶ有資格の専門職員（司書）がいるか、人と人、人と資料が出会う快適な利用環境が整えられているかといった基本的要件を満たしているかどうかである。 地域に根差した質の高いサービスを実現するには、職員が地域のことを深く知ることが大切であり、そのために職員が地域に出ていくことが欠かせない。 改めて書架全体を見渡すと「地域の今」を扱った資料が少ないことに気付かされる。地域の今の課題は何か、どんな動きがあるのか、どんな人がいるのか、それを知る有効な資料が殆ど無いのである。 図書館は様々な年代の人が立ち寄れる場所だ。そんな場所で「そこら」づくりで培った経験と人脈を活かした地域密着の取り組みを進めることで、市民に東近江のことをより深く知ってもらう機会となっている。地域の魅力に気づいた市民は東近江の魅力をPRする人になってくれるのではないかと考えている。これも図書館が地域の振興に寄与できる一つの成果ではないだろうか。	●		●教育施設		職員の知識向上 「地域の今」を知る資料の不足 市民の理解の向上
D	【事例9】伊那市立高遠町図書館	●図書館所蔵の古書を活用した「高遠ぶらりプロジェクト」。アプリのコンテンツは「高遠ぶらり」のほか、江戸時代に高遠藩下屋敷があった新宿御苑周辺を案内する「内藤新宿ぶらり」や「伊那谷ぶらり」などが追加され、関係地域や人の情報を多面的に知ることができるアプリとプロジェクトに発展（B）（D） ●地域住民と図書館が主催する「高遠ブックフェスティバル」。このフェスティバルを通じて古書店と図書館がつながり、古書市場の情報や資料の紹介を受けたり、散失の恐れがある地域資料の保存へ向けた活動を広げることができている（B）（C）（D） ●まちの再発見につながる「高遠文芸賞」。観光で訪れた方々に自分の感じた"高遠"を表現してもらう手段。地域にとってありふれた風景が観光とつながり、訪れた人々との関係を維持し、地域外への露出増を目指す取り組みでもある。（C）（D）	伊那市立図書館では「伊那谷の屋根のない博物館の屋根のある広場」をキャッチフレーズに、目の前に広がる自然の中に残された歴史資産や自然遺産を活用する活動を行っている。こういった活動のベースには、高遠町図書館に所蔵されている高遠藩時代の古文書や絵図などを地域に還元し、資料を自由に活用・表現する人々を増やし、地域を知り・楽しむこと、情報を発信することの重要性を実感する"場"を提供したい、との思いがある。 高遠ブックフェスティバルは、地域内外の出店者や来場者と地域とつなぐことで、商店などとの関係人口を醸成し通年で訪れる人を少しずつ増やしている。 高遠町図書館の関わるプロジェクトは、本やデータをまとめ、"情報"とすることで、これまでの「情報と情報」、「情報と人」、「人と人」のつながり方を再構築しようとする試みだ。こうした活動は図書館を八ブとした人や団体、施設などの交流を促し、地域観光資源発掘にも寄与できるものと思っている。		●	●資産・遺産の活用	●交流創出	●繋がり再構築	地域理解、情報発信等の重要性 交流促進、資源発掘

終わりに

観光と図書館の連携・融合については、先人がその必要性・有効性を唱え、今、あらためて注目が集まりつつある。

知的遺産の宝庫で誰でも利用できる図書館は、その考え方や取り組み方次第で、観光と結びつく可能性は高い。

特集2で、「甲州市立勝沼図書館」は、「地元『勝沼』の根を支える唯一無二の図書館でありたい」と述べられた。地域の観光振興にも取り組む図書館を、当館もその一翼を担う専門図書館として支援していきたい。

（よしざわきよよし／おおすみかずし）

（注）各事例からの抜粋は、文意が変わらないように留意しつつ、一部削除等をしている場合がある。資料：（公財）日本交通公社作成

※1…「観光と図書館の融合」（2010年7月1日、松本秀人、北海道大学観光学高等研究センター発行）など

※2…（アニメ）作品のロケ地、またはその作品・作者に関連する土地で、かつファンによってその価値が認められている場所を訪ねること。

地域の観光に寄与する図書館注目事例

図書館名	所在	開館年	取組タイプ：観光対象・来訪目的となる図書館	観光客の滞在・時間消費の場となる図書館	地域をつなぐ図書館	地域魅力を発信する図書館	その他	概要
札幌市図書・情報館	北海道 札幌市	2018年10月				●		「さっぽろ創世スクエア」にあり、市外観光客やビジネス客の来館も見込む。1階エリアの開放的な空間には北海道・札幌の魅力を伝える図書や雑誌・カルチャー誌などを揃え、札幌や北海道の魅力を発信。
八戸ブックセンター	青森県 八戸市	2016年12月	●		●			「本のまち八戸」の拠点施設として市が運営。近隣の拠点施設（八戸ポータルミュージアム、八戸まちなか広場マチニワ）などとも連携した多彩な企画事業を実施。出張者や観光客も注目。
国際教養大学中嶋記念図書館	秋田県 秋田市	2008年	●					建築家仙田満氏設計。秋田杉などを組み合わせた壮麗な空間をもつ。日中は一般に広く開放されている。
紫波町情報交流館（図書館）	岩手県 紫波町	2012年8月			●		●	補助金に頼らない公民連携開発「紫波町オガールプロジェクト」として注目を集める。イベントや様々な交流の場となるオガール広場に面した官民複合施設「オガールプラザ」内に図書館と地域交流センターから成る「情報交流館」がある。産直マルシェも入り、施設全体が集客装置となり、人口3万人の町に年間100万人が来訪。
太田市美術館・図書館	群馬県 太田市	2017年4月	●		●			美術館、図書館、カフェ、ショップ、イベントスペース等から成る複合施設で建築魅力が高い。図書館と美術館の融合により"自由な街の中のような場所"を創り出している。地域とつながる「おおたまちじゅう図書館」には市内40施設以上が参加。
草津町立温泉図書館	群馬県 草津町	2015年11月（移転）	●	●				草津温泉バスターミナルに移転し、「草津町立温泉図書館」に改称（2015年11月）。温泉資料を集めた「温泉本コーナー」を設置。
杉戸町立図書館	埼玉県 杉戸町	2006年3月		●	●			近隣の日帰り温泉施設（杉戸天然温泉「雅楽の湯」）をワンコイン（500円）で楽しみ、再び図書館で読書を楽しむ限定イベント「温泉&宿泊図書館」を2017年より毎年10月に開催。
千代田区立千代田図書館	東京都 千代田区	1955年12月（駿河台図書館から改称）			●	●		2007年5月千代田区役所新庁舎竣工に伴い移転。区内観光にも対応するコンシェルジュサービスを提供。2008年より始めた神保町を巡る図書館発のツアーは、区外在住者の参加が7割を占める。区内の博物館・美術館や出版社等との地域連携による展示コーナーも常設。
甲州市立勝沼図書館	山梨県 甲州市	1996年11月	●	●	●	●		地域の基幹産業である「ぶどう・ワイン」の資料を収集（約3万点）。市内全ワイナリーの資料（ワイナリーファイル）を揃える。20年以上続く『ぶどうとワインの資料展』、地元ワイナリー若手集団とのイベントなど地域に根差した図書館づくりに取り組む。
小布施町立図書館まちとしょテラソ	長野県 小布施町	2009年	●	●	●	●		図書館建築としても高い評価を受け、立ち寄る観光客も多い。カウンターは観光案内などコンシェルジュ機能も担う。2012年より観光客と住民の交流を楽しむ仕掛けとして「まちじゅう」図書館を開始。
塩尻市立図書館	長野県 塩尻市	2010年（移転）			●	●		本館は塩尻市市民交流センター「えんぱーく」内にある。ワインに関する資料（本館）や漆器に関する資料（楢川分館）など、地場産業に関するコレクションが充実。
伊那市立高遠町図書館	長野県 伊那市	1986年10月			●	●		図書館所蔵古書を活用した携帯端末用アプリ「高遠ぶらり」（デジタルツール）制作とともに、参加者が街歩きをしながら地域を知る活動を展開（高遠ぶらりプロジェクト）。地域内外の出展者・来場者と地域をつなぐ「高遠町ブックフェスティバル」、町の再発見につなげる「高遠文芸賞」の創設（2018年）など。
伊那市立伊那図書館	長野県 伊那市	―			●			南アルプスと中央アルプスの2つの山荘に山岳関連の本を備えた「山の図書館」を開設（2016年7・8月）。2017年度より「二度目の旅は図書館から」をテーマにした企画イベントを実施。地域の図書館とテーマ・企画内容を共有・連携した取り組みを行う。県内各市町村のパンフレットやチラシ、地域情報誌等を集めた観光情報コーナーを設置。
愛知県図書館	愛知県 名古屋市	1991年4月				●		

図書館名	所在	開館年	観光対象・来訪目的となる図書館	観光客の滞在・時間消費の場となる図書館	地域をつなぐ図書館	地域魅力を発信する図書館	その他	概要
岐阜市立中央図書館「みんなの森ぎふメディアコスモス」	岐阜県岐阜市	2015年7月	●		●			ホール、ギャラリー、スタジオ等を併設した複合施設。建築家伊東豊雄氏設計による岐阜県材をふんだんに活用した「屋根のついた公園」のような図書館建築が特徴。図書館周辺の店舗に本棚を置いた私設図書館「ぎふまちライブラリー」やそれらを巡るツアーも。
高山市図書館「煥章館」	岐阜県高山市	2004年4月	●			●		明治時代の飛騨地域近代学校創立の先駆けとなった煥章学校を模した図書館建築。外国人観光客向けの観光情報提供、伝統文化等市の観光文化の発信など観光エリアの図書館としてのサービスを充実。
多治見市図書館	岐阜県多治見市	1997年4月	●			●		1997年4月、複合施設「まなびパークたじみ」内に新館開館。国内有数の陶磁器資料コレクション（陶磁器関連書籍や図録など約8000点）を所蔵。地場産業や研究の支援、文化の紹介などに大きく寄与している。
富山市立図書館	富山県富山市	2015年8月（移転）	●				●	富山市立美術館や銀行、カフェ、ショップなどからなる複合施設「TOYAMAきらり」に移転開館。建築家隈研吾氏設計による個性ある建築。図書館の本を美術館に持ち込むことができる。
金沢海みらい図書館	石川県金沢市	2011年5月	●					壁面に大中小6000個の丸窓をあつらえ自然光を取り込んだ美しい図書館。世界的にも高い評価を受ける現代建築が集まる建築のまち金沢の立ち寄りスポットの一つ。
東近江市立八日市図書館	滋賀県東近江市	1985年				●		地域の人に読んでもらい、まちの魅力に気づいてもらう郷土資料のリトルプレスともなる地域情報誌「そこら」を発行。情報収集、編集には市役所内各課・職員や市民、各種団体が協力・参画。
奈良県立図書情報館	奈良県奈良市	2005年11月		●	●			本の特別貸し出しや、図書館主催イベント参加者への特別宿泊プランの設定など、最寄駅にあるホテル日航奈良と連携。全国の都道府県立図書館と連携しポスターやパンフレット等の図書館交流展示など、図書館を観光に活かす取り組みを実施。
大阪府立中之島図書館	大阪市	1904年	●					古文書や大阪関連の文献、ビジネス関係分野に特化。創立100年を超える図書館は国の重要文化財に指定され、建物を目的に訪れる観光客も多く、ガイドツアーも実施。ライブラリーショップやカフェも人気。
伊丹市立図書館ことば蔵	大阪府伊丹市	2012年7月			●			中心市街地活性化、遊休地の活用といった市の課題を受け、郊外からまちなかの商店街に移転。酒蔵の跡地を活用し、町並みに融合するように整備。1階の交流フロアでは年間約200回ものイベントを開催。
島根県海士町「島まるごと図書館」	島根県海士町	2010年10月（中央図書館）			●			2007年より「島まるごと図書館構想」を推進。海士町立中央図書館のほか、学校図書館、公民館、福祉センター、診療所などの図書館をネットワークし島全体をまるごと一つの図書館にしている。
雲の上の図書館	高知県梼原町	2018年5月	●	●				建築家隈研吾氏設計による森の中で読書しているような地元材をふんだんに使った建築（福祉施設との複合施設）。「コミュニケーションラウンジやボルダリングコーナーなど、人々が出会い交流する機会を創出。
武雄市図書館・歴史資料館	佐賀県武雄市	2013年4月（改装）	●					全面改装し、カルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）を指定管理者として運営。TSUTAYA図書館第1号として話題を集めた。武雄温泉駅から近く観光客も多く立ち寄る。入館者数は年間90万人を超える（2017年度）。
都城市立図書館	宮崎県都城市	2018年4月（移転）	●					市街中心部の商業施設（ショッピングモール）の閉鎖を受けて再生した複合施設Mallmall（まるまる）内に移転・リニューアール。かつてのまちの賑わいの核となってきた歴史的建築物の趣きを巧みに活かしリノベーションを実現。
指宿市立指宿・山川図書館	鹿児島県指宿市	2006年1月			●		●	指宿市・山川町・開聞町の合併を機に2007年指定管理者制度へ。NPO法人本と人をつなぐ「そらまめの会」が運営。市民参加型の図書館フェスティバルのほか、喜入駅～指宿駅までの列車での昔話やオリジナルで魅力あるグッズ開発などにも取り組む。
恩納村文化情報センター	沖縄県恩納村	2015年4月	●	●	●	●		沖縄有数のリゾート地に立地し観光情報機能と図書館機能を兼ね備えた複合施設。博物館を併設。全国どこに住んでいても本を借りることができる。「おんなの駅（農産物物販センター）」の商品割引やリゾートホテルへの「ミニライブラリー」の設置など、周辺観光施設との連携サービスにより高い相乗効果を発揮。

取組タイプ

第17回

「たびとしょCafe」

「東北1000kmをつなぐ〝みちのく潮風トレイル〟～自然資源を生かした地域の活躍の場づくり～」

Guest speaker
櫻庭佑輔氏（さくらば・ゆうすけ）
1977年生まれ。
環境省東北地方環境事務所自然環境整備課 課長補佐。
北海道函館市出身。高校・大学では山岳部に所属し、北アルプスなどの山々を踏破。
「みちのく潮風トレイル」の構想が生まれた2011年当時は本省の国立公園課に在籍。
「良いトレイルづくりのためには自分の足で調査することが不可欠」と、
11年11月から13年3月にかけて、のべ47日間をかけて青森県八戸市蕪島から福島県相馬市松川浦までを歩く。
13年4月からは東北地方環境事務所に勤務し、東北の現地でトレイルづくりに奔走。

2019年7月24日(水)、「東北1,000kmをつなぐ〝みちのく潮風トレイル〟～自然資源を生かした地域の活躍の場づくり～」をテーマに、第17回たびとしょCafeを開催しました。

「みちのく潮風トレイル」は、東日本大震災からの復興に資するため、環境省が2011年から取り組んでいる「グリーン復興プロジェクト」のひとつです。歩くことで、その土地の自然と暮らしに出会い、震災の記憶に触れ、地域ににぎわいが生まれることを目指しています。

今回は、構想段階から全線開通まで、第一線で担当した環境省の櫻庭氏をお招きし、みちのく潮風トレイルの魅力、構想のきっかけ、検討過程、意義などをお話しいただきました。

後半の意見交換では、情報提供、ルート整備、安全管理、交通事業者との連携、ガイド育成、地域住民の意識醸成、インバウンドなど、様々な視点からの質問が飛び交い、非常に熱気に満ちた会となりました。

【第1部】話題提供

みちのく潮風トレイルの概要

●みちのく潮風トレイルは、北の玄関口：青森県八戸市蕪島から南の玄関

海岸沿いに設定されたみちのく潮風トレイル：三王岩遊歩道（岩手県宮古市）

口：福島県相馬市松川浦までをつなぐ、総延長1，025㎞のロングトレイル。ロングトレイルとは、歩いて旅をするための長い道のこと。具体的な距離数の定義はないが、日本ロングトレイル協会登録のトレイルの中で、みちのく潮風トレイルは圧倒的に最長。海岸沿いに設定されていることも大きな特徴。2019年6月9日に全線開通した。

みちのく潮風トレイル構想のきっかけ～加藤則芳氏の存在～

●みちのく潮風トレイルは、日本にロングトレイル文化を紹介した第一人者と言われる作家、加藤則芳氏のアイディアにより生まれた。加藤氏は自然保護に関する造詣が深く、国立公園制度の父であるジョン・ミューアの研究でも知られる。人間は自然の中で生まれ、自然と調和を図りながら生きてきた生き物であり、そのことを忘れてはならないという意味で「人は本来、自然人であったはずだ」という言葉を残している。

●2011年3月の東日本大震災発生直後、環境省に加藤氏が訪れ、震災復興のために東北太平洋沿岸にロングトレイルを作ってはどうかと提言された。世界的に見ても海岸部のロングトレイルは珍しく、海外からの来訪も期待できるとのことだった。また、三陸の厳しい崖の海岸線を上り下りしたり、満潮時には通行不可になるようなトレイルをあえて設定する、つまりゲーム性を取り入れたアドベンチャートレイルとするべきと主張された。この提言を受けて、みちのく潮風トレイル構想がスタートした。

●みちのく潮風トレイルを提言された当時、加藤氏はすでにALS（筋萎縮性側索硬化症）を発症しており、トレイルの全線開通を目にすることなく2013年4月に亡くなられた。動けなくなる直前まで車いすで全国各地に講演に回り、人と自然が触れ合う場としてロングトレイルがいかに素晴らしいかを広めていた。

●トレイルの設定にあたっては、設定者が自ら歩いて自分で体感することが必要だという加藤氏の指示を受け、自分がのべ47日間かけて現地を歩き、それを加藤氏に報告し、アドバイスを受けるという形でルートの構想を練っていった。

●東日本大震災後、環境省としては、自然の脅威とそれへの対抗という面だけではなく、自然から受けている恩恵の面もきちんと見つめながら復興を進めるよう提案してきた。三陸沿岸には南北に長い三陸復興国立公園（旧陸中海岸国立公園）があり、ロングトレイルとの相性も良いということで事業が進められた。

みちのく潮風トレイルの検討過程

●みちのく潮風トレイルの大きな特徴は、地域の意見でルートを作り上げたという点。地域住民が参加するワークショップの場で情報を持ち寄り、現地調査を行い、現地調査の結果を踏まえてルート案を決定するという流れで進めた。開催したワークショップは全線で200回を超える。このように地域住民自ら作り上げたトレイルというのは、日本の他のトレイルでは聞いたことがない。

●みちのく潮風トレイルは自然の中を通る道であり、夏場は下草刈りが欠かせない。こうした維持管理作業は、多くはボランティアを募ってイベント形式で実施している。1泊2日の草刈りイベントに30～50人の申し込みがあり、過去には大阪や九州からの参加もあった。

地域住民による草刈り作業（岩手県山田町）

●トレイルの維持管理にはもちろん地域住民も参加し、外の人と地域住民の交流の場になっている。外の人からの「こうした取り組みはぜひ続けるべきだ」という反応が、地域住民のトレイルに対する愛着の醸成につながっている。

みちのく潮風トレイルの意義

●観光とは、地域に存在する資源の魅力を体感することであり、優れた観光とは、旅行者が地域を学ぶ、理解するというプロセスを経ることだと考えている。みちのく潮風トレイルを通して実現したいことは、歩く旅の復権である。長距離を時間をかけて歩くことで地域の人たちとの交流が生まれ、そのなかで様々な思いを巡らせることのできるロングトレイルは、地域に対する深い理解につながるものであり、非常に満足度が高い旅になると考えている。

●観光関連事業の費用対効果の説明に際しては、一般的には利用者数や経済効果が指標となるが、本来的な意味での震災復興を考えたときに、経済が回れば地域がすごく良くなるかというと必ずしもそうではない。利用者がいかに満足したかが問われるべきであろう。

●震災という大きなダメージを受けた地域を通るトレイルにとって、地域振興にどのように貢献できるかは非常に重要な命題。みちのく潮風トレイルを歩いて地域資源の魅力を体感することで、地域に伝わる知恵や生活様式といった価値に気づいてもらい、都会に地域を応援する気持ちの人を増やしたい。また、そうした応援者が増えることで、地域に住まう人が地域の価値に気づく機会を生み出したい。

●ロングトレイルという長い時間をかけた旅では、抜きつ抜かれつ何度もすれ違うハイカー同士の心のつながりが生まれる。また、歩く速度だからこそ、ハイカーと地域との触れ合いも生まれる。これがロングトレイルの本質的な魅力である。

●今後の展開を考える際、三陸には雪が降らないというのは大きなアドバンテージだと考えている。冬山登山は難しいがハイキング程度なら楽しみたいという方は、冬季の東北観光にとってうってつけのターゲットになるだろう。また、1,000㎞を超える長いトレイルであることがリピーター化にもつながると期待している。

はしごを使って登るルートも：
北山崎自然遊歩道（岩手県田野畑村）

加藤則芳氏が目指したもの

●現代社会は、団体に加わって得られる利益が成員の関心の中心になって結合される利益社会＝「ゲゼルシャフト」が中心となっている。加藤氏は、自然的・直接的に打算抜きで結合した共同社会＝「ゲマインシャフト」の価値観を顧みることが、現代人の暮らしを豊かにすることにつながると考え、ロングトレイルを日本に紹介し続けた。

●自然体験の提供においては、フロントカントリーとバックカントリーという2つの考え方がある。フロントカントリーは、観光地として整備され管理責任者がいる場。一方、バックカントリーは強烈な自然体験を提供する場であり、自己判断・自己責任での行動が求められる。加藤氏は、バックカントリーをみちのく潮風トレイルに組み込むべきだと主張していた。満潮になると通れないようなところにトレイルを設定すれば、満潮か干潮をあらかじめ判断する必要が生じ、長旅であれば潮の干満時刻を踏まえた行動計画も必要となる。現時点のみちのく潮風トレイルには、バックカントリーの要素はあまり組み込めていないが、今後は、一歩進んだアウトドアの楽しみ方も提案していきたい。

【第2部】意見交換

参加者…宿泊施設に関する情報提供はどうなっているか。

櫻庭氏…名取トレイルセンター（宮城県名取市に環境省が設置）を運営している「NPO法人みちのくトレイルクラブ」にて、宿泊施設や観光サービスを紹介するガイドブックの作成を進めている。WEBにも掲載する予定。同

センターは現地の観光推進団体ともつながりを持って情報収集しており、今後、みちのく潮風トレイルのワンストップ窓口として機能するよう準備を進めている。インバウンド対応も拡充予定。

参加者…ルートサインや案内版、スマホ対応マップ作成の予定はあるか。

櫻庭氏…今年度中にみちのく潮風トレイル全線にサインが整備される予定。スマホ対応マップについても今年度中の公開を目指して作成を進めている。プロハイカーの現地調査を踏まえて必要な情報をピックアップし、現在取りまとめ作業を進めている段階。

参加者…いいとこ取りで楽しみたい場合のおすすめ区間はどこか。

櫻庭氏…〝海のアルプス〟と言われるだけあり、岩手県の区間は崖の上り下りもあってかなり厳しいルートになっている。青森県、宮城県、福島県はフラットな区間が多く、年配の方でも歩いていただけるだろう。

人気があるのは八戸の種差海岸。二次交通が充実しているため区間を分けて歩きやすく、民宿も多い。また、民宿の方たちの多くがルート設定のワークショップにも参加しているため、ハイカーに対する理解度が高く、お弁当付きプランなどハイカー向けのサービスも充実している。

参加者…交通事業者と連携した日帰りコースの設定などの取り組みはあるか。

櫻庭氏…みちのく潮風トレイルの3分の2程度は、二次交通を利用しながら歩けるようになっており、JRの「駅からハイキング」にもマッチするだろう。

また、環境省や三陸鉄道、岩手県北バス職員の有志で「俺たち歩こう会」を結成し、トレイル以外にも旧街道や塩の道などを歩いてツアー造成を検討するという会を開いている。こうした情報共有が下地となり、三陸鉄道でもトレイルツアーの試行を始めたところ。

参加者…トレイルの楽しみ方を伝えるための取り組みを知りたい。

櫻庭氏…トレイルの魅力を分かりやすく伝えるのはなかなか難しい。コンテンツづくりは精力的に進めてきたが、広報はまだこれからという状況。最近は年に3・4回、アウトドアグッズ製造会社のイベントなどでPRしている。広報は行政が苦手とする分野であり、民間セクターが中心となって進めていく必要があるだろう。また、地域側の認知度を高めることも重要で、地域住民の購読率が高いローカル紙の取材は積極的に受けるようにした。

ガイド事業者については、現在プロとしてトレイルガイドを行っているのは八戸くらい。他には、ルート設定ワークショップに参加していた方たちが、副業的にガイドを引き受けるという動きが少しずつ見られ始めている。

参加者…実際にトレイルを歩いてみて、地域の中でもトレイルに対する認知度に差があるのではないかと感じた。

櫻庭氏…ハイカーの存在が当たり前になってくると、トレイルに対する認知度が高まり、様々な活動の広がりが生まれてくるだろう。世界で最初にできたロングトレイルであるアメリカのアパラチアントレイルでは、地域住民がハイカーに対して宿や食事を提供することが日常的に行われており、彼らはトレイルエンジェルと呼ばれている。こうした取り組みが成立する理由は、国認定第一号のロングトレイルが自分たちのふるさとにあることを非常に誇りに思い、ハイカーたちを尊敬していることにある。また、こうしたトレイルエンジェルの存在が、全世界のトレイルの中でアパラチアントレイルが最も格式が高いと、ハイカーたちが認める理由になっている。日本では、四国遍路が近いイメージだろう。みちのく潮風トレイルも、アパラチアントレイ

砂浜を歩くルートや木々の中を歩くルートも
上：大須賀海岸（青森県八戸市）
下：トドヶ崎自然歩道（岩手県宮古市）

ルやお遍路さんのように、存在として定着し、文化として熟成され、その地域と一体化したトレイルに育てていきたいと思う。

参加者…フランス人はトレイルに対する関心が高い。外国人に対する情報発信はどうなっているか。

櫻庭氏…実際に欧米系の方がトレイルを歩いているという報告もある。トレイルセンターに英語ができるスタッフを配置しているほか、今後はテレワークで多言語対応化も進める予定。イギリスやシンガポールの記者から取材を受けたことがあり、その記事が広告媒体となっている。

参加者…既存の道をつないで新たなトレイルとすることに対して、地域住民には何をつくると説明したのか（地域住民のモチベーションはどこにあったのか）。

櫻庭氏…このエリアは陸中海岸国立公園（現在は三陸復興国立公園）という国立公園エリアで、素晴らしい海岸景観をいいとこ取りで楽しむための遊歩道がもともとあった。地域の方には、「この遊歩道を昔みなさんが使った道でつないでください」と呼びかけた。道を思い出す作業を通じて、道がつながるだけでなく、道にまつわる自分自身の物語も抽出されていった。地域の方にとっては、自分と関わった道が復活するという期待感があり、トレイルの設定やその後の維持管理に参加するモチベーションになっている。

参加者…みちのく潮風トレイルのルートと復興工事の関係は？

櫻庭氏…沿岸部には万里の長城のごとく防潮堤が建設されており、一部は海が見えない区間もある。防潮堤の上にルートを通している区間もある。山あり谷あり海岸ありと歩き、里に下りると防潮堤、防潮堤を越えて町場に入り必要なサービスを受けた後、再び防潮堤を越えて山側に戻るというルートになっている。自然が好きな方は八戸～金華山までのルートがまさにロングトレイルらしいルートとなっている。南側のルートは町場と近く、気軽に食べ歩きなども楽しめるルートとなっている。区間ごとに特徴があり、好みに応じて選択してもらいたい。

参加者…安全管理体制について知りたい。

櫻庭氏…地域にもともとある救命や防災システムと連携しての対応を基本と考えており、今後各地区の消防や消防団との情報共有を強めていく必要がある。全線サイン整備後、各サインにナンバリングを行い、その番号で自分の場所を識別し、救助側にスムーズに伝えられるようにする予定。また、ハイカーにはラジオやクマ鈴、スズメバチに刺されたとき用のリムーバーなどを携行するように注意喚起している。

参加者…ワークショップの集客方法、ワークショップで掘り起こした情報の扱いについて知りたい。

櫻庭氏…ワークショップの集客は役場が発行する広報誌が主な手段。その際、その後の合意形成がスムーズになるよう、各地区の区長には必ず参加してもらうようにした。地域の歴史に詳しい教育委員会出身の方も議論において重要だった。役場の協力を得るために、各市町村の首長の理解を得ることは非常に重要。

　また、ワークショップで掘り起こした情報の裏付けや蓄積は、他の担当者は行っていたかもしれないが自分はしてこなかった。この情報はトレイルの魅力を伝える貴重な情報源で、今後何らかの形で情報共有が必要だと思う。

司会…日本交通公社では、みちのく潮風トレイルと同じグリーン復興プロジェクトのひとつである、復興エコツーリズム推進モデル事業を担当していた。岩手県久慈市、洋野町、山田町、宮城県気仙沼市唐桑半島、塩竈市浦戸諸島、福島県相馬市松川浦の6か所のモデル地域のうち、浦戸諸島において、地域の方へのインタビューと図書館資料の情報を整理して、地域の隠れた魅力を掘り起こしたガイドブックを作成したことがある。トレイルやエコツアーのガイドさんのヒントブックになるだけでなく、このガイドブックが地域の方自身が地域の魅力に気づくきっかけになった。また、学校の教材としても使われている。

参加者…入込客数以外に、効果測定手法として想定しているものはあるか。

櫻庭氏…現状ではトレイルマップの配布数でカウントしたり、ハイカー自身に数取器を押してもらってカウントしているが、いずれも正確な数値ではないため、赤外線カウンターの導入を検討している。適切な設置場所が難しいが、90％程度の精度で間違いなくトレイルを歩いている方をカウントできそうな箇所を、10地点ほどピックアップして設置することになるだろう。

みちのく潮風トレイルにかける想い

司会…みちのく潮風トレイルにここまで熱心に取り組める理由を聞かせてもらいたい。

櫻庭氏…長崎県の五島列島に駐在時、九州自然歩道を五島列島まで延伸することになった。自分が赴任した時点でルート計画はある程度固まっていたが、設定者自らによる現地調査を踏まえず机上だけで引いた道、歩く人の目線に立って考えられていない道だったため、非常につまらない道となっていた。

困った私が上司に相談したところ、加藤則芳氏を紹介され、実際に五島列島まで来ていただいた。その時にはすでにALSを発症しており、かなり体は辛かったはずなのだが、自分が生きている間にロングトレイル文化を日本に定着させたいという意気込みで、熱心に指導いただいた。

五島列島での任期をまもなく終える頃、東日本大震災が発生し、環境省本省では加藤氏の提言を受けてみちのく潮風トレイル構想が産声を上げていた。年度が変わり、4月1日付で本省勤務になると、トレイルをはじめとする三陸復興推進チームに加わることとなり、加藤氏と再会することになった。

加藤氏本人の熱意はもちろん、その周囲の人たちも、とてつもないエネルギーを持っていた。それは加藤氏が亡くなられた今でも変わらずに続いている。そうした人たちの中にあって、これは生半可な気持ちでは関わってはいけないと思うし、公務員だから自分だけ先に抜けます、という気にも全くならない。人事面での配慮もあり、みちのく潮風トレイル構想が生まれてから全線開通までの8年間半にわたって関わり続けることができたのは、仕事冥利に尽きると感じている。

おわりに

終了後、参加者の皆さまからは、「トレイルについてほぼ初めて知ったが理解が深まった」「歩く旅の復権という主張に心から共感する」「加藤則芳氏の熱意を受けて取り組みを続けていらっしゃる方々の物語自体に感動した」といった感想をいただきました。

私自身は復興エコツーリズム推進モデル事業で東北太平洋沿岸地域に関わった経験があり、そこで知り合った素敵な人たちの取り組みを紹介したいという思いで、今回のたびとしょCafeを企画しました。一人でも多くの方に、東北の魅力が伝わることを願っています。

（文：観光文化情報センター企画室副主任研究員 門脇茉海）

草刈り作業中の一コマ（岩手県山田町）

わたしの1冊
第16回

『外食産業創業者列伝』

牛田泰正 著／路上社2018年

学校法人トラベルジャーナル学園
ホスピタリティツーリズム専門学校 校長
中村 裕

先日、大学の英語部の後輩である牛田泰正氏（弘前医療福祉大学短期大学教授、弘前大学非常勤講師）から一冊の本が送られてきた。彼は長年日本の外食産業を研究し、数多くの外食産業の経営者並びに創業者と親交を深めてきている。その縁で出来たのがこの『外食産業創業者列伝』だ。

この本には多くの創業者が紹介されているが、中でも鉄板焼き「ベニハナオブトーキョー」の創業者ロッキー青木氏の話が、私には深く印象に残った。本の紹介というのがこの連載の趣旨だが、私の知人でもあったロッキー青木氏についてのエピソードを紹介することで、この本の概要と創業者の姿を感じていただければと思う。

ロッキー青木氏は学生時代にレスリング日本選抜の一員としてアメリカに遠征したのだが、そのままアメリカに残って経営学を学び、起業した。アメリカで一番成功した日本人とも言われる人物だ。

１９６４年、鉄板焼きレストラン「ベニハナオブトーキョー」１号店をニューヨーク、マンハッタンに開業。パフォーマンスを取り入れた鉄板焼きが人気を博した。この１号店を皮切りに、「ベニハナ」を、アメリカ国内の約80店舗含む１００店舗以上の世界的レストランチェーンに成長させている。

日本に帰国した際も、新しい商品づくりや商品そのものを日本からアメリカに持ち帰るべく研究をしていた。当時、ロッキー氏がよく宿泊していたロイヤルパークホテル内の鉄板焼きレストランでは、鉄板焼き寿司を新たなメニューに加え、大好評を博していた。ビーフ、フォアグラ、あるいは白身の魚等を寿司の具として供していたのだが、ロッキー氏は目を輝かせ、アメリカのベニハナでも是非メニューに入れたいと言う。ホテル側も快くそれを受け入れた。

数か月後、アメリカの鉄板焼きのコックさんはイメージができず、どうしても同じものができないということで、再来日。今度は準備から完成品までを動画に収め、帰国した。

半年後また来日し、やはりだめだ、諦めた、との話を聞いた。試行錯誤の末に日の目を見なかった事例ではあるが、彼のエネルギッシュな仕事の取組みを感じさせるエピソードである。

ロッキー氏は２００８年７月に他界している。東京の病院に入院するためにとりあえずアメリカに帰り、長期不在の準備をし、東京に戻る予定だったが、帰国前に容体が急変し、日本に帰ってくることはなかった。

氏は「ベニハナオブトーキョー」の経営者としてのみならず、気球で太平洋を横断した冒険家、バックギャモンのプレーヤーとしても有名で、多彩な趣味を持ち、〝人生は死ぬまで挑戦だ〟と言い続け、また、ビジネスも冒険も成功の秘訣は夢を持ち、手段を考え抜き、命がけでやることだ、とも言っている。

ベニハナオブトーキョーとロッキー青木の名は、これからも日米で語り継がれることだろう。今は夫人が青木氏の後を継ぎ、世界中のベニハナを配下に収め多忙な毎日を送っているようだ。

中村 裕（なかむら・ゆたか）
１９４０年東京都生まれ。１９６３年明治大学政治経済学部卒業後、東京ヒルトンホテル入社。グアムヒルトン営業支配人、東京ヒルトンインターナショナル総支配人などを歴任。１９８８年、三菱地所入社、ロイヤルパークホテルに出向し、総支配人。三菱地所常務取締役、ロイヤルパークホテル社長、会長、ロイヤルパークホテルズアンドリゾーツ社長、一般社団法人日本ホテル協会会長などを経て、２０１１年からホスピタリティツーリズム専門学校校長。著書に『しゃべれない人のホテルでの英語―一流ホテル自由自在』（ＫＫベストセラーズ、１９８６年）、『ホテルの基本は現場にあり！』（柴田書店、２０１０年）、『理想のホテルを追い求めて』（共著、オータパブリケイションズ、２０１４年）。

“観光を学ぶ”ということ　ゼミを通して見る大学の今

第4回

琉球大学
国際地域創造学部・観光社会学研究室

観光社会学ゼミ

「観光を通じた地域振興、あるいは地域振興のための観光」がこの研究室・ゼミのテーマ。「地域貢献がしたいから観光を学ぶ」人たちが見据えるものは何か？

越智正樹（おち・まさき）
琉球大学国際地域創造学部 教授。専門は観光社会学、地域社会学。京都大学大学院博士後期課程修了後、琉球大学観光産業科学部教授等を経て2018年度より現職。主な著書に『せめぎ合う親密と公共―中間圏というアリーナ』（共著、京都大学学術出版会、2017年）、『フィールドから読み解く観光文化学―「体験」を「研究」にする16章』（共著、ミネルヴァ書房、2019年）などがある。沖縄のグリーンツーリズム、DMO、旅行業、地方創生などに関する委員を歴任している。

1 学科／プログラムの沿革とゼミ

弊学において「観光科学科」は、2005年度、旧法文学部内の1学科として誕生致しました。これは、国立大学法人では全国初の観光学を専門とする学科でした。2008年度、この学科は同学部経営学専攻と共に「観光産業科学部」として独立し、この学部の2学科のうちの1つとなりました。さらにこの2学科は2018年度、旧法文学部の経済学専攻、地理歴史人類学専攻、国際言語文化学科と合流して「国際地域創造学部」となりました。1学部1学科のこの新学部において、観光科学科は「観光地域デザインプログラム」という1学修プログラムへと生まれ変わっています。

観光科学科として最後の学年である13期生は、現在3年生となりゼミを履修しております。一方、観光地域デザインプログラムの1期生はまだ、ゼミ配属されておりません。そこで本稿では、観光科学科のゼミについてご紹介致したいと思います。

観光科学科の学生（正確にはその9期以降の学生）は、2年後期からゼミに配属されます。本格的なゼミは3年生から開始するのに対し、2年後期ゼミはプレゼミと呼称し、ゼミ活動の基礎を学ぶ期間としております。ゼミは各教員が独立して1つずつ担っており、その活動内容はもちろん担当教員の専門ごとに異なっております。4年ゼミは学科カリキュラムの集大成科目として位置づけておりますが、学生に求める成果物もまたゼミごとに異なっております。以下、私の担当するゼミのケースについてご紹介致します。

2 観光社会学ゼミのテーマと進め方

❶ゼミのテーマ

観光科学科は、持続可能な観光のコンセプトを共通基盤とした上で、提供専門科目をツーリズム・ビジネス、ツーリズム・デベロップメント、ツーリズム・リソースマネジメントの3領域に分類しております。このうちリソースマネジメントに位置づけられている観光社会学ゼミは、観光を通じた地域振興（あるいは地域振興のための観光）の考究、およびそのための社会調査をテーマとしております。ここにおいて当ゼミが主眼を置いているのは、観光

サイドというより地域社会サイドです。つまり、観光と地域との関係性を考えるにおいて、あくまで地域の側に立脚し、その視点から見て観光はいかなる選択肢として存在するのかを検討しています。これはおそらく、本連載でこれまでにご紹介になったゼミや、観光系と称して一般的に想像される専門領域のイメージとは、いささか異なるものかも知れません。

ただ――これは私の個人的経験によるものですのでどこまで一般化できるかはわかりませんが――観光系の学科と言っても学生の中には、観光産業と

伊計島の島民観光業者へのゼミ調査

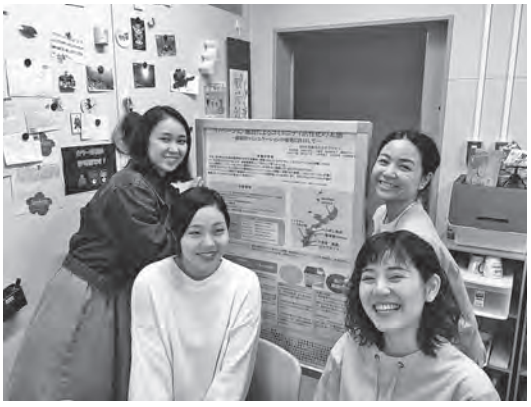
いうより地域にこそ関心のある者も少なくはありません。ある学生は、「高校生の頃から地域貢献になることがしたくて、地域貢献になると言ったら観光だろうと思ったので、この学科に入学した」との旨を語っておりました。加えて、このような意思を持つ者たちにとって、「地域貢献になると言ったら観光」という考えは、観光産業従事者を目指すということに直結するものでもありません。進路の志望は多岐にわたっております。事実、私のゼミの卒業生（現在までで6学年）のうち、観光関連産業に就いている者は17・9%です。

観光系の学科におけるこうした実態については、好ましからざるものとして見る向きも世にはあります。ですがまず、観光よりも地域貢献に主眼を置く高校生においても観光学が進路先たり得ていることは、これもまた観光立国・観光立県振興の成果の1つであるでしょう。そもそも1980年代以降、人々が観光に抱いてきた希望は、経済的な希望、政治的な希望、社会的な希望など、多様な観点からのものでした。それがいつしか統合された挙げ句、ある希望が他の希望の上位概念かのように僭称し、下位に位置づけられたものを不可視化してしまう。現にそうした傾向は世に見られます。この傾向に抵抗することは、観光のもつ可能性を矮小化しないために重要であると考えます。その抵抗とは、一塊で扱われがちな観光の希望について、いったいどの部分が誰にとってのどのような希望なのかを冷静に見つめ直し、丁寧に解きほぐして再提示することです。地域貢献を志向して観光学へと進んだ学生には、このことを学んで欲しいと思っています。そしてそのようにして観光への理解を深めた学生たちが、卒業後に多様な分野で活躍していくことは、観光立国・観光立県の条件をさらに正しく整えていくことに繋がるのではないでしょうか。

❷ゼミの進め方

さて、地域という語は非常に曖昧にも使われる言葉ですが、社会学として見る時には多少正確な捉え方が求められます。地域社会学の基礎的な定義で言いますと、地域社会・地域空間として認められるのは最大でも市町村レベルであり、最小は単位自治会とされます。当ゼミでも実際の調査活動では、単位自治会レベルを対象とすることが多いです。ただしその対象は、担当教員である私が設定したり準備したりするものではありません。以下、プレゼミから4年後期ゼミに至る、当ゼミの進め方をご紹介致します。

まず2年後期（10～1月）は先述のようにプレゼミと呼称し、3～4年ゼミ活動を行うための基礎を学ぶ期間としています。と言っても重視しているのは、学的概念や方法論の学習ではなく、問題意識の涵養です。まずもってこれが無ければ学ぶ準備が整わず、これが整わなければあらゆる学習の効果は低いというのが私の考えです。そのためプレゼミではまず、様々な着地型観光現場を訪れてみたり、市町村やコ



ポスター発表資料の完成

ンサルタントと共に実践的活動に参画したりします。後者の例としては、粟国島という小離島で、村事業の空き家利活用調査を一部受け持たせていただいたり、沖縄本島南部の八重瀬町で、観光プロモーション事業の一環たる広報イベントの企画・準備・催行を、コンサルタントと協働で行わせていただくなどして参りました。ここにおいて、ゼミ生には一定の達成感を覚えて欲しいのももちろんですが、それ以上に私が求めるのは、「やはりまず自らの知見を高めてからでないと、いきなり地域貢献しようとしても出来ることは知れている」と感じてくれることです。それが、次のステップへの入り口となります。

冬休みになるとプレゼミは、3年ゼミへの直接的な準備に入ります。各自、それぞれに興味のある学会誌論文を1本選び、その内容をパワーポイントに端的にまとめます。パワーポイントを使う理由は、論文の論理構造を的確に把握して情報縮約する上で、スライド構造が良い補助機能を果たすからです。冬休みの宿題としてまとめたこれを、1月のプレゼミで順次発表します。発表に際しては、自身がその論文のどのようなところに関心を持ったかについても語ることを課しています。こうして、現場と関わる学術論文の論理に触れ、また他のゼミ生らの問題関心も共有した上で、春休みの宿題に取りかかります。すなわち、3年ゼミでグループ調査したいテーマを各自それぞれに考え、やはりパワーポイントでプレゼン資料を作成することです。

当ゼミでは、3年生は全員で1つのグループ調査を行います。ただし実査に入るのは夏休み以降であり、前期は丸々、調査計画の立案に費やします。まず全員が春休みの宿題について発表した後に、ディスカッションを行います。単純にどれか1つの案を選ぶというのではなく、各案で共通する関心事項を抽出して合併したり折衷したり、その過程でまた新たな案を着想したりします。いくつかの候補地の視察を経て案が1つに定まったら、計画の精緻化に入ります。私が求めるのは、大目的（一般的課題・研究背景）、中目的（対象事例への問題意識）、小目的（リサーチ・クエスチョン）、成果の予想（中目的・大目的と対応）、そして調査スケジュールを、明確に設計することです。そこにおいて特に重視するのは、遂行可能性と（他者から見ての）成果とのバランスです。この研究計画は前期末に、弊学科観光景観学ゼミとの合同報告会で発表し、他ゼミ生や他教員からのコメントを受けて微修正します。

調査はインタビューが主で、私も同席しますが、アポイント採りも含めて全て学生主導で行います。その最終成果は年末に、再び右記ゼミとの合同報告会で発表します。最終報告に際しては、パワーポイント資料と共にA1サイズのポスターも作成し、その縮刷版は必要に応じて調査協力者にお送りしています。もちろんそこで提示・提案できることには限界が大きいですが、ゼミ生ら自身が考えたテーマで、現実的に設計した計画を、ゼミ生ら自身が遂行することの意義は大きいと考えています。また私自身にとりましても、毎年いったいどのようなテーマが飛び出すのか蓋を開けてみないと分かりませんから、これが楽しみで仕方なくもあります。

1月になると3年生は、各自の卒論テーマ案のプレゼンに入ります。4年生では1人で1つの調査を行うわけです。ただし3年生と比して成果の要求レベルを上げるのではなく、3年生では全員でやったことを今度は1人でやってみる、というのが4年生の課題です。研究計画は計画書として明文化することが求められ、これに対して私がゴーサインを与えない限り、調査には着手できません。就活も忙しい4年前期はほぼこれに費やします。後期のゼミは、各自の進捗状況を報告してコメントし合う、言わばプロジェクト総本部会議のような様相を呈します。最終的に成果は卒業論文としてまとめますが、当ゼミではこれを敢えて6ページ

南城市で集落観光の視察

程度にまとめることを求めています。文系の卒論としては短いこの分量は、読者を意識して情報の取捨選択を厳密に行い、一言一句に責任を持ちながら自身の主張を精緻に立論する能力を涵養するために設定しているものです。

3 ゼミ活動の例

以上ご紹介した調査活動を、当ゼミでは「メインゼミ」と称しています。これは前節で述べたような教育意図をもって遂行しているものですが、一方で学生にとりましては、実直な調査だけでなくより直接的な実践活動もやはり魅力的なものです。そこで、こうした実践的な活動を「サブゼミ」と称し、希望するゼミ生（一部他ゼミ生）が参加できるように設定しております。以下、紙幅の限りですがこれら2種類のゼミの具体例をご紹介致します。

❶メインゼミの例

当ゼミ生が案出するテーマは、観光産業が既に盛んな地域よりも、有形無形の地域資源を活かしてこれから観光振興していこうとする地域を対象とするものが多いです。3年ゼミで言いますと例えば、伝統工芸と観光を結びつけようとする南風原町での調査では、地域資源活用に向けた地域内連携がなぜ困難であるかが考察されました。また、うるま市の観光計画に組み入れられたある無人島に関する調査では、無人といえど蓄積されてきた社会関係が明らかになる一方、その不可視化や文化的真正性の希薄化の進展が問題として浮き彫りとなりました。

一方、既に観光地として認知されている地域においても、特徴的な調査が行われました。例えば有名なアメリカンビレッジを沿岸部に擁する北谷町では、同地の事業者と近隣自治会だけでなく、そこからわずか1km内陸部ながら高齢化の進む地区も調査することで、観光政策が回避できていない意思齟齬と不均衡が指摘されました。

4年生の卒論につきましては、当研究室ホームページにて要約集を公開しておりますので、宜しければご笑覧いただけますと幸いです。

宮古島で実践者に対する報告会

八重瀬町での産官学協働イベント

❷サブゼミの例

メインゼミが基礎調査を重視する一方で、サブゼミは主にニーズプル型の活動を志向しています。例えば、宮古島の教育旅行民泊団体への事業協力として、実地体験しながら意見提示を行いました。また、ある企業と協力し、沖縄世界遺産関係の情報コンテンツ作りを行ったこともあります。さらに学生の希望があった時には、観光関連のコンテストに参加したこともありました。その他、ニーズプル型の活動はプレゼミの中に組み込むことも多いのですが（先述の粟国島などの例）、3～4年生も希望する場合にはサブゼミとしての参加を可能としています。

4 今後に向けて

こうしたゼミ運営の仕方については、ご承知のとおり、教科書や教育マニュアルがあるわけではありません。全て、歴代のゼミ生らの声を聞き反応を見つつ、彼ら彼女らと共に作り上げてきたものです。当然それは完璧なものとは言えません。ですが、ゼミ生らが観光学に求めるところのフィードバックを日々感じ取り試行錯誤できることは、私の勉強でもあり喜びとするところでもあります。

冒頭に述べましたように、次年度からは新学部の1期生をゼミ生として迎えます。新学部ではゼミは2年後期末からとなり大きな変化が求められるのですが、引き続きゼミ生と共に「観光と地域」を考え続け、ゼミを作り上げていきたいと思います。（おち・まさき）

機関誌

観光文化

○この一年のバックナンバーの紹介です。
○2006年11月発行の180号からは、当財団ホームページで全ページ公開しています。
○印刷版の単号販売は、アマゾンamazon.co.jpで承っております（オン・デマンド印刷）。
○印刷版の定期購読は当財団のホームページからお申込みください。

242号（2019年7月発行）

特集 多様化するビジネストラベル

近年、業務を目的とした旅行に休暇を組み合わせる“ブリージャー（Bleisure）”、休暇を目的とした旅行に業務を組み合わせる“ワーケーション（Workation）”、更には特定の拠点を持たずに国内外を移動し暮らしつつ仕事をするライフスタイルなどが海外において拡大し、日本においても徐々にその動きが始まっています。こうしたブリージャーやワーケーションなどの動きは、訪問先である都市や地方にとっては、従来1人の来訪者であったものが家族同伴になる、1泊であったものが2泊、3泊と長くなるといったビジネスチャンスの拡大を意味しています。一方で、地域や施設の対応が従来のビジネスパーソン向けだけでは十分でなく、新たに対応すべき事項が生じてくる事が想定されます。こうした背景のもと、本特集ではビジネストラベルがどのように多様化しているのか、どのような課題や可能性があるのかを示し、今後の対応について検討しています。A4判1色56ページ／1,000円+税

241号（2019年4月発行）

特集 特産品を活用したインバウンドの経済効果向上

訪日外国人旅行者の地方訪問が増えています。それに伴い、各地域でインバウンドによる経済効果を高めるための様々な取り組みが行われています。こうした取り組みを進めるにあたっては、域内調達率（地域内から原材料や雇用者を調達する率）を上げる観点から、各種地域資源を活用することが重要です。中でも「特産品」の活用は、旅行者がお土産として購入することで消費単価の向上につながるだけでなく、特産品自体が誘客の源となって旅行者数の増加につながるなど、経済効果を高めることが期待されます。本特集では、特産品の、インバウンドによる経済効果の向上に果たす役割について、検討しています。
A4判1色52ページ／1,000円+税

240号（2019年1月発行）

特集 観光客急増で問われる地域の“意思”

世界的規模で旅行者が急増する中、一部の地域では、許容範囲を超えた観光客の来訪および行動による生活・商環境の悪化や観光客の体験の質の低下などが確認されています。今後も環境変化が見込まれる中において、観光を、我が国の成長を支える基幹産業としていくために、そして持続可能な地域を形成していくために、我々は今観光にどう向き合うべきか。こうした環境変化を経験しながらも、地域で議論を積み重ね、地域の意思を明確に示し、行動してきた各地の取組を通じて、我が国の持続可能な観光のあり方を模索します。
A4判1色78ページ／1,000円+税

239号（2018年10月発行）

旅の図書館 開設40周年 記念号

特集 古書から学ぶ

「旅の図書館」は2018年に開設40周年を迎えました。開設以来、観光・旅行に関する最新の図書や雑誌に加え、明治・大正・昭和戦前期の古書や地誌、社史といった古い資料も収集してきました。こうした古書の中には、その分野、その時代において大きな影響を与えたものや、現代にも通じる示唆を投げかけるものも多く存在します。また、思わぬ発見やアイデアの宝庫であることに気づかされます。本特集では、古書を活用しながら研究を進めている先生方に、それぞれの分野の歴史を語る上で欠かせない古書や、ご自身の研究において影響を受けた古書をご紹介いただいています。古書の魅力や古書から学ぶ面白さを知っていただき、古書を手に取るきっかけとしていただけたら幸いです。
A4判4色60ページ／1,000円+税

公益財団法人 日本交通公社 発行の出版物のご案内

○当財団発行の最近の書籍の紹介です。
○印刷版は、アマゾン(amazon.co.jp)にて、オン・デマンド印刷で販売しています。

『温泉まちづくり』(発行:2019年3月)
－2018年度 温泉まちづくり研究会 総括レポート－

温泉まちづくり研究会は、観光まちづくりに熱心に取り組む温泉地が集まり、温泉地に共通する課題についてその解決の方向性を探り、全国に情報発信することを目的として2008年6月に発足しました。第1ステージ(2008～10年度)では、「入湯税の有効活用」「環境負荷の少ない温泉地づくり」「歩いて楽しい温泉地づくり」など5つのテーマについて議論を重ね、提言集『温泉まちづくりの課題と解決策』(2011年5月)を発刊しました。第2ステージ(2011～12年度)は、会員温泉地に共通する現実的な課題や半歩先ゆくテーマを取り上げ、解決策や望ましい方向性を模索しながら実践型研究会としてステップアップを目指しました。具体的には、「震災後の消費者の意識変化」「長期滞在への対応」「ひとり旅への対応」「温泉地、温泉旅館の価値」といったテーマについて考えました。続く、第3ステージ(2013～15年度)も、より実践的なテーマを掘り下げ、「温泉地における観光まちづくり財源」「景観整備」「滞在プログラム」「自然災害」「雇用と人材」などについて、各分野の有識者・実践者を交えながら議論を行いました。毎年の活動成果は「総括レポート」として取りまとめ発刊しております。2016年度から18年度までの3年間は「第4ステージ」と位置づけ、これまで以上に温泉地の課題解決に向けた議論を行ってまいりました。最終年度である2018年度は、温泉地と宿泊業において喫緊の課題となっている「インバウンド」と「雇用問題」について、最新の情報を有識者・政策ご担当者からご教示いただきながら議論を行いました。本総括レポートは、2018年度の研究会における議論の内容を取りまとめたものです。温泉地の方々が具体的なアクションを起こす際のヒントになりましたら幸いです。A4判1色70ページ／1,500円+税。『温泉まちづくり』は2011年度版からホームページで全ページを公開しています。

『平成30年度 観光地経営講座 講義録』
(発行:2018年11月)

今回のテーマは「多様化する宿泊事業に対応する観光地経営」。宿泊事業は世界的に大きく変化し、我が国の宿泊事業もその流れの中にいます。その具体的変化について、国際規模での宿泊事業投資のコーディネーター、ファンドも活用しながら所有と経営を分離し多店舗展開を行っている宿泊事業者、日本で世界基準のコンドミニアム事業を立ち上げてきた開発運営事業者、そして、自身が持つ住居系不動産(アパート)を利用し新たな宿泊事業に取り組む方々を講師に招き、宿泊事業に生じている「変化」「ダイナミズム」を共有しました。その上で地域として何を目指し、宿泊事業をどのように地域に呼び込み、育て、発展させていくのかについて、ディスカッションしました。観光地に対する「投資」はその地域の持続的な成長に欠かせない要素です。インバウンドが動いてきた現在が、そうした投資を呼び込むチャンスです。地域における宿泊施設の活用について考えるヒントになればと思います。A4判1色80ページ／1,000円+税。『観光地経営講座 講義録』は平成25年度版からホームページで公開しています。

『旅行産業論 改訂版』(改定版発行:2019年2月)

本書は、立教大学観光学部で2013年より開講している「旅行産業論」「旅行業経営実務」の講演内容を、同学部内に設けた旅行産業研究会において精査し、旅行産業の実態を俯瞰できるよう再構成するとともに、立教大学の教員を中心としたメンバーにより学術的、俯瞰的視点からの論説を加えたものです。2019年2月に、現状に合わせた改訂を行いました。旅行業を目指す方をはじめ、旅行・観光産業に携わる方が、旅行業の全体像を学べるものとしています。構成は、大学の講義での活用も念頭に全14講。第1講では「旅行」「観光」の定義や、「旅」のそもそもの役割や価値がわが国の歴史の中でどのように変遷、変化していったかを確認し、近代的な旅行業創業への過程について述べています。第2～4講では、戦後の社会・経済の枠組みの構築に対応し、旅行業が産業として自立していく過程を振り返るとともに、旅行業における商品や経営、財務面での特性について述べています。第5～6講では、近年の旅行マーケットの成熟化や質的変化について述べ、特にその具体事例としてのFITおよびLCCの動向について詳しく検証しています。第7～12講では、第5～6講で述べた旅行マーケットの動向、変化、あるいは社会経済環境の中、旅行会社がどのようにビジネス展開をしてきたかについて、店頭販売やメディア販売といった消費者に近い部分から、ビジネストラベル、グローバル展開にいたるまで幅広に述べています。併せて、それらビジネスを支えるシステムについても述べた上で、旅行会社の事業開発戦略について論じています。そして第13～14講で、これまで旅行会社が果たしてきた役割や社会的価値、これからの旅行会社が果たすべき役割や未来像、求められる人材について論じています。旅行業が、さまざまな分野・部門から構成されていることや、時代の変化に応じて役割を変化させながら、社会的役割をどう担ってきたのか、これからの可能性がどこにあるのかといった面に注目していただければと思います。
A5判218ページ／2,000円+税

図書のご案内

『観光地経営の視点と実践[第2版]』
(2019年4月 発行:丸善出版、3,000円+税)

観光を専門とする学術研究機関である日本交通公社が長年培ってきた経験および知見を「観光地経営」という視点に立ち体系化したものです。わが国の観光地は、外国人旅行者の急増、人口減少による需要衰退、交通条件・IT整備等による旅行先の多様化・分散化など、市場環境の変化の真っ只中にいます。本書は2013年の初版発行後の日本の観光に関する大きな変化に応じて改訂し、持続的な地域経済の維持・発展を図るため、「企業活動」と「まちづくり」を有機的に結び付け観光地全体をマネジメントしていく「観光地経営」の考え方を提示しています。公益財団法人日本交通公社 編著／B5判 268ページ

公益財団法人日本交通公社
旅の図書館
LIBRARY OF TOURISM CULTURE

の

ご案内

「旅の図書館」は、観光関連の学術誌や観光統計資料の他、古書・稀覯書、ガイドブック、時刻表、機内誌、観光研究の専門図書、財団の刊行物・出版物など観光研究の参考に資する図書約60,000冊をとりそろえた専門図書館です。
1978年（昭和53年）より、文化的、専門的な旅行や観光に関する情報をご提供するため、当財団は「観光文化資料館」（1999年に「旅の図書館」に改称）を開設し、多くの方にご利用いただいてまいりました。「観光はそれ自体が文化であり、その観光文化を向上させたい」という開設当初の理念を継承しつつ、2016年、移転を機に、「観光の研究や実務に役立つ図書館」をコンセプトとしてリニューアルオープンしました。
様々な文献から“研究の種”を、多くの参考事例から観光政策や観光地づくりの“現場に活かすヒント”を見つけてください。

【開館時間】月曜日～金曜日、10:30～17:00
【休館日】土曜日・日曜日・祝日・毎月第4水曜日・年末年始
※上記以外に、会議開催等による臨時休館もありますので、ご来館の前に旅の図書館のHPをご覧下さい。
【ご利用にあたって】
○館内のご利用にあたっては、1F受付カウンターにてご利用の手続きをお願いします。
（B1Fメインライブラリーご利用の際は、ご本人確認ができる身分証明書を毎回ご提示いただきます）
○本の館外貸し出しは行っておりません。

アクセス

●青山通りからお越しの方…東急不動産のビルをくぐり、レストラン『NARISAWA』の前を通る公開空地を通り抜けますと、正面左側が日本交通公社ビルです。
●外苑東通りからお越しの方…コンビニエンスストア『ポプラ』の角を西に曲がり、2つめの交差点を越え、約10m先左側が日本交通公社ビルです。
●駐車場はございません。

〒107-0062 東京都港区南青山二丁目7番29号 日本交通公社ビル
東京メトロ銀座線、半蔵門線、都営大江戸線「青山一丁目」5番出口から徒歩3分

機関誌
観光文化
第243号
第43巻４号 通巻 第243号（季刊）

●発行日 2019年10月10日
●発行所 公益財団法人日本交通公社
〒107-0062
東京都港区
南青山二丁目7番29号
日本交通公社ビル
☎03-5770-8350
https://www.jtb.or.jp
●特集企画・構成 吉澤清良・大隅一志
●デザイン 川口繁治郎（Rivers More）
●校閲・校正 株式会社ぷれす
●編集協力 井上理江
●カメラ 村岡栄治
●制作・印刷 JTB印刷株式会社
●発行人 末永安生
●編集人 有沢徹郎
●編集室 ☎03-5770-8364
mail: kankoubunka@jtb.or.jp
ISSN 03855554

機関誌

観光文化

第243号

第43巻 4号 通巻 第243号

公益財団法人 日本交通公社
Japan Travel Bureau Foundation

〒107-0062 東京都港区南青山二丁目7番29号 日本交通公社ビル
TEL:03-5770-8350 FAX:03-5770-8358

禁無断転載

ISSN 0385-5554